

浦添城跡第二次発掘調査概報

1984年3月

沖縄県浦添市教育委員会

序

本報告書は昭和57・58年の2ケ年度事業として、国・県の補助と指導をいただき取り組んだ浦添城跡第2次発掘調査の概報です。

当初、昭和57・58年の2ケ年度事業として本年度に報告書を刊行する予定にありましたが、予想以上に遺構・遺物が出土したため、昭和59年度に前年究明できなかった遺構の解明と報告書の刊行を委ねることになりました。

調査は昭和57・58年とも6月初旬から10月初旬とうだるような夏真盛りをはさむ中、発掘関係者の努力で無事発掘を終了し、大きな成果を得ることができました。ここに、あらためて労苦に深く感謝申しあげる次第でございます。

最後に、調査・本概報の刊行にあたり御指導、助言を賜わりました沖縄県教育庁文化課の当真嗣一主任専門員・上原静専門員両氏をはじめ、関係各位に深く感謝申し上げます。

本報告書が広く市民・県民の方々に利用され、浦添城跡の保存・活用・研究に役立てば幸いです。

昭和59年3月

浦添市教育委員会

教育長 西 原 正 次

例

言

1. 本報告書は、昭和58年度に実施した浦添城跡第二次発掘調査の中間報告である。
2. 本遺跡の発掘調査は、文化庁の補助（80%），と沖縄県の補助（10%）により実施したものである。
3. 調査は浦添市教育委員会が調査主体になり，沖縄県教育庁文化課埋蔵文化財の専門員が担当して行った。
4. 本遺跡出土の遺物は，浦添市教育委員会において保管中である。

目 次

第Ⅰ章	はじめに	1
第1節	調査に至る経緯	1
第2節	調査の経過	1
第3節	発掘調査及び整理の体制	1
第Ⅱ章	位置と環境	7
第1節	位置と環境	7
第2節	歴史的展開	7
第Ⅲ章	調査の成果	8
第1節	展望台広場地区	8
A	遺 構（石塁）	8
B	遺 物（石塁に伴なう遺物）	8
C	遺 構（溜め井）	18
D	遺 物（溜め井に伴なう遺物）	20
第2節	松林地区	31
A	遺 構	31
B	遺 物	31
第3節	南側城門地区	41
A	遺 構	41
B	遺 物	41
第Ⅳ章	ま と め	43

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

浦添城跡は戦前より多くの研究者、諸関係機関等によって表面踏査や一部の試掘調査が行なわれ、広く学会にも知られた城跡であるが、去る大戦で地形的変更を著るしくこうむったのち、採石工事、墓地造成工事、公園整備事業等によって幾度となく部分的な破壊を受け今日にいたっている。この様な状況の下で、近年当城跡を含む地域の都市公園事業が計画されるにいたって、城跡の破壊をこれ以上増幅させないためのでだてが必要になり、浦添市教育委員会は城跡の範囲、遺構及び遺物等の保存状態を確認し、行政的保存処置を構ずる目的で発掘調査を実施することにした。

本城跡は東西380m、南北60～80mの規模の大きい城跡であるため、調査地域の区分から継続事業として計画され、昭和57年度に一次調査が行われ、今年度（昭和58年度）は二次調査にあたる。前調査は主として城郭の規模、城壁の広がり等の外郭を確認することが主たる目的でなされ、今回はそれを受けて城郭内の建物遺構等の状況を調べるために行なわれた。

第2節 調査の経過

発掘調査は昭和58年6月13日から10月3日までの約3ヶ月行なわれ、調査日程の前半は遺構の検出調査、後半は検出された遺構の実測調査が主となった。

調査地区は第3図に示す様に城内の中央に位置する広場からその南側地域（現展望台の西側広場から遊歩道をこえた南側部分）、城内の西側に広がる松林内（現愛国知祖之の塔の東側一帯）、城内中央広場より南方向の一段低くなった縁端部地域（一次の発掘調査で城壁及び埋葬人骨を検出された東側一帯）の三つの区からなる。

遺構は各区で検出されたが、当初よりその遺構の一部を地上に露出させるものもあり全体にその表土の被覆はあさく、露出した遺構下の状況を確認するため、三ヶ所にて試掘をした結果、下層にも包含層が広がる事が確かめられ今回検出された遺構群は主として上層に属するものであることが知られた。

発掘の総面積は700㎡となっている。

第3節 発掘調査及び整理の体制

本遺跡の発掘調査及び整理の体制

1. 調査の組織

調査主体 浦添市教育委員会

事務担当 前津政廣（浦添市教育委員会文化課文化財係）

調査担当 上原 静（沖縄県教育庁文化課専門員）

調査補助 下地安広（浦添市教育委員会文化課臨時職員）

発掘作業員 宮城茂一、又吉武盛、石川信夫、宮里正三郎、銘苅三郎、諸見里ユキ、宮城トミ、新城シズ、翁長シズエ、宮城トミ子、与那覇チヨ、（浦添市民）

実測作業員 比嘉典子、島袋千賀子、島尻秀美、湧川真由美、住友千恵子（浦添市民）

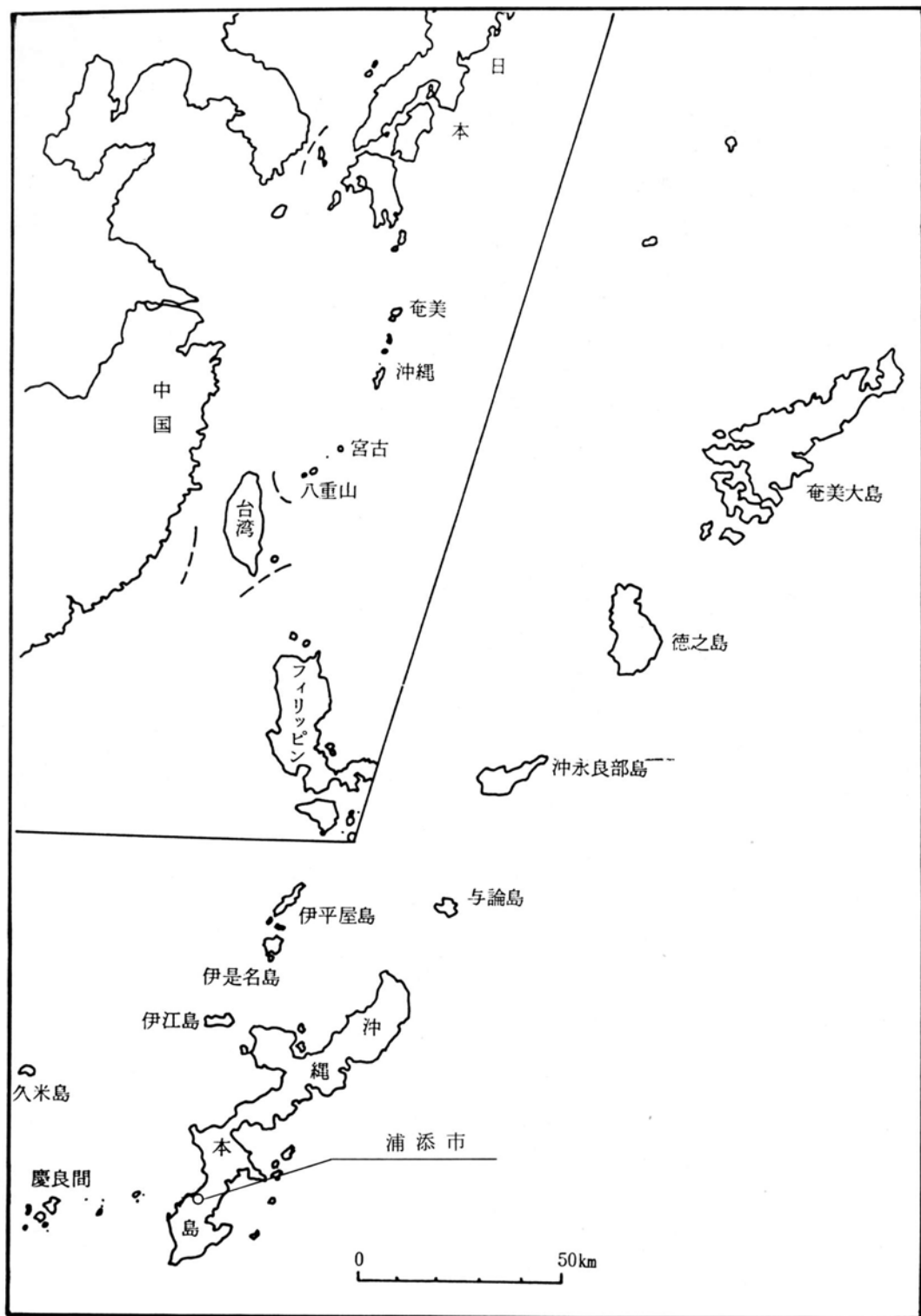
2. 資料整理及び概報作成の組織

遺物洗浄・拓本・実測・トレース比嘉典子，島尻秀美，湧川真由美，住友千恵子，親川清美，嘉数喜久子，与那原めぐみ（浦添市民）

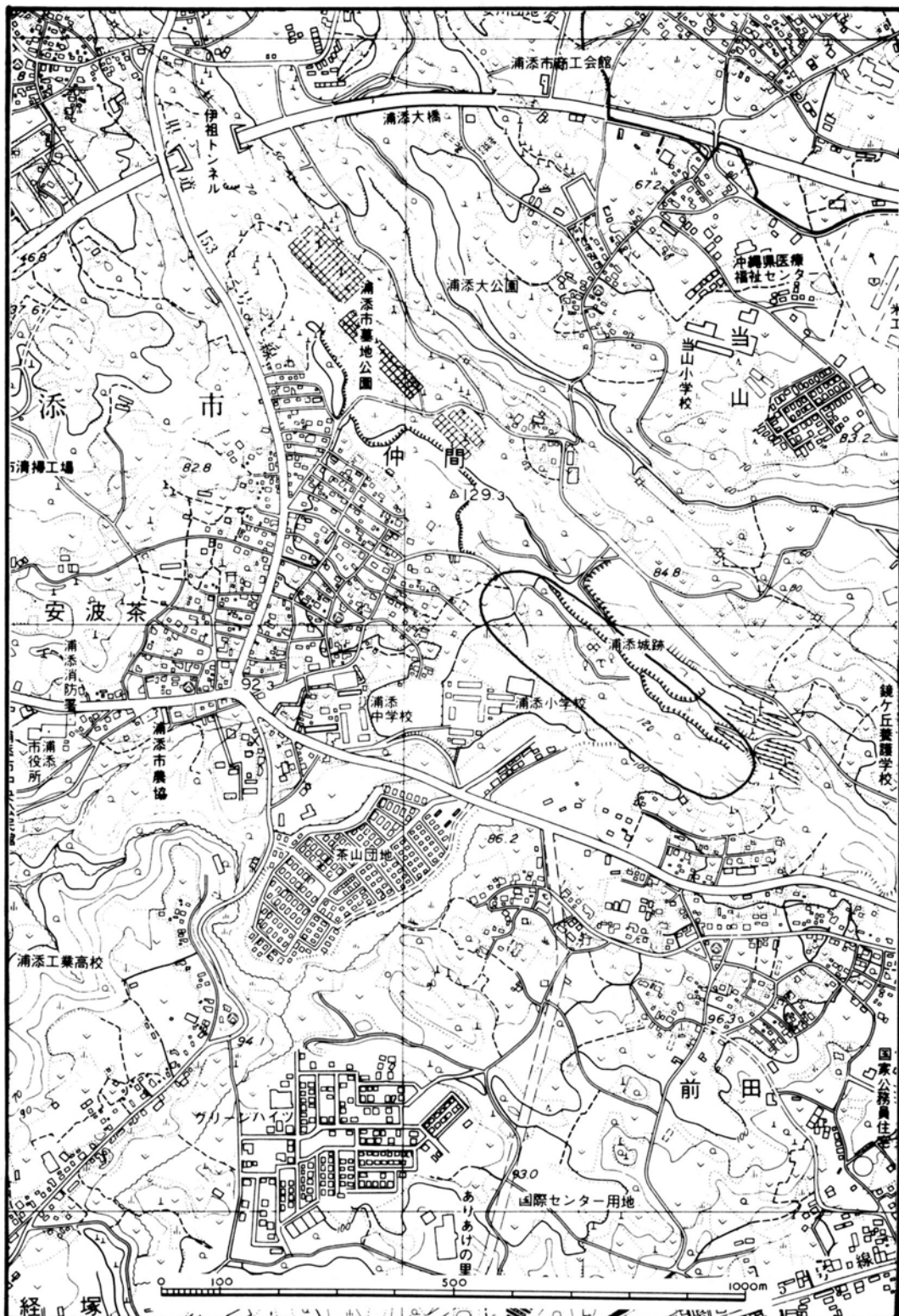
編集・執筆 上原・前津・下地

出土品撮影 下地

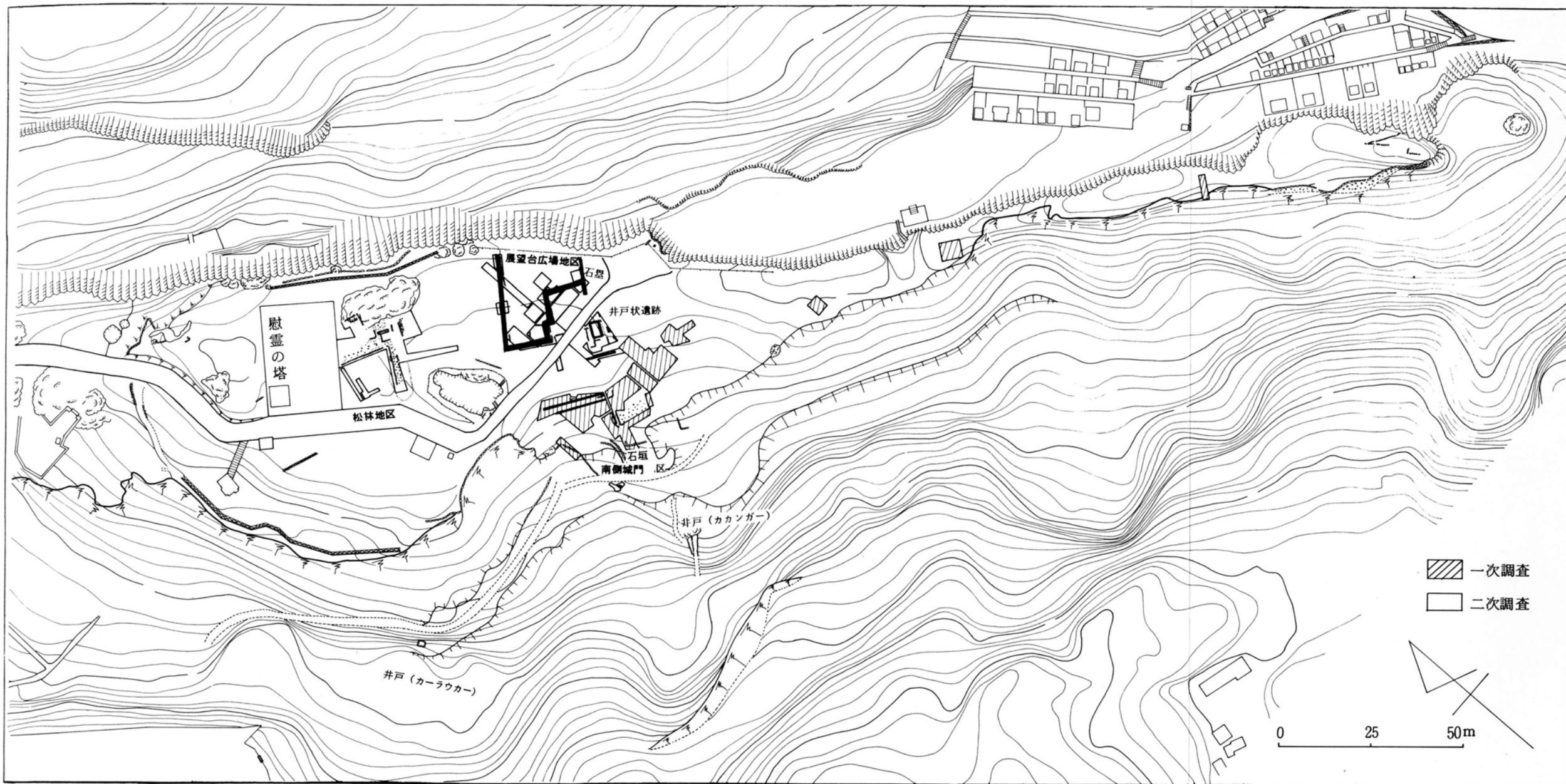
全体のまとめは当真嗣一（沖縄県教育庁文化課主任専門員）が担当した。



第1図 浦添市の位置



第2図 浦添城跡の位置



第3図 グリット設定図

第Ⅱ章 位置と環境

第1節 位置と環境

浦添城跡は沖縄本島中南部、浦添市字仲間の小字城原にある。市の中央よりやや北側、字仲間から牧港を通る琉球石灰岩の丘陵が延びる東側の先端部に位置する。

標高130～140mを測る要害の地に築かれた城である。本城が立地するこの石灰岩の丘陵は、南北に1.7kmと細長く発達しており、北側が断層の発達により断崖面を形成しているのに対し、南側は比較的な斜面をなしている。

丘陵の北側崖下には、英祖王（1260～1299年）と尚寧王（1589～1620年）の王陵ようどれがあり、西側には仲間部落、南側には前田部落が展開している。東側には為朝岩（ワカレ瀬）、城内には大城、小城（ナンジャムイ、クガニムイ）浦添城内の殿が、城跡の近くには「テラガー」、「アザナガー」、「カカンガー」、「カーラウカー」、「ユムチガー」等の井泉が点在している。

又、丘陵の西側、本城より約1.5kmには英祖王の父祖代々の居城といわれている伊祖グスクが立地している。

グスクからの眺望はよく、眼下にむかっの貿易港として栄えた牧港を、北の方には広く中部一円を望み、南側には慶良間諸島や首里、那覇をはじめ、南部のグスクが数多く立地する丘陵地帯が、展望できる景勝地となっている。

第2節 歴史的展開

浦添城跡は、舜天王（浦添按司1187～1237年）の居城と記されているが確証はない。記録によれば、舜天王統に続く英祖王統や察度王統はいずれも浦添の出であるとされており、これらの三王統のうち、いずれかの時代に築城されたことはほぼ間違いない。

浦添城は、首里遷都とともに廃墟と化していくが、その後浦添城のことが記録ではっきりするのは16世紀に入ってからである。第二尚氏尚真王の長子尚維衡が父王の不興をかい、浦添城に遷されている。その時、城郭は荒廃し住居に耐えられなかったので、那覇の我那覇家の邸宅が新築されたという。

又、「喜安日記」によれば慶長14年（1609年）島津侵攻の際、城下の龍福寺とてもひ浦添城が戦火にあったと記録されている。その時炎上した建物がそれと考えられる。

慶長14年（1609年）に島津にとらわれの身となった国王尚寧は二年後帰国するが、これより6年後の万暦45年（1617年）の冬、浦添城を改修し隠居したと「宣志松嶺親雲上家譜」と伝えている。

浦添城跡に関するその後の記録は無く現在に至っているが、古老の話によると、城内にはごく近い頃まで番所が存在していたという。

第Ⅲ章 調査の成果

調査の結果、遺物包含層の保存状態は平場地域にあるためか破壊が著しく、その出量も少ないが、遺構は思いのほか保存良好であった。展望台広場地区で石塁、松林地区で石塁、石畳、南側城門地区で石垣がそれぞれ検出されている。以下、各地区ごとに遺構及び伴出遺物の代表資料を記載し説明をおこなう。

第1節 展望台広場地区

A 遺構 (第4図)

a 石塁

表土層のニービ質赤土下20～50cmより検出された。第4図のごとく軸を北東方向に向けるように、直線構成と90°の角をもって、広場をめぐる。石塁は黒褐色混礫土層に埋設され、基底の石が残り、多いところで3段まで確認されるが大方が上部全て破壊されている。石塁の幅は160～190cm全長56mをはかる。石塁の石積は左列と東列(軸を北とするものと仮定)に若干の差異がみられ、東列の組み合わせが、西列に比較し密で、石自体の加工も丁寧なものを使用している。これまでの石塁のあり方は外面が内面に比して積み方等が緻密なことからすると、先述の石塁では西区域が東区域に比べ内になろうか、レベル的にも約15cm程、西区域が低くなっている。

南側の石塁周辺には、後述の溜め井遺構周辺に分布するものと同様のコーラルが敷かれている。今回建物遺構の発掘をこころみたわけであるが、幸にグリット内からは面を有する礫や、礎石の検出に成功したのである。ところでこれら遺構は後世の攪乱を受け、当初の配置をみることはできなかった。

B 遺物 (石塁に伴なう遺物)

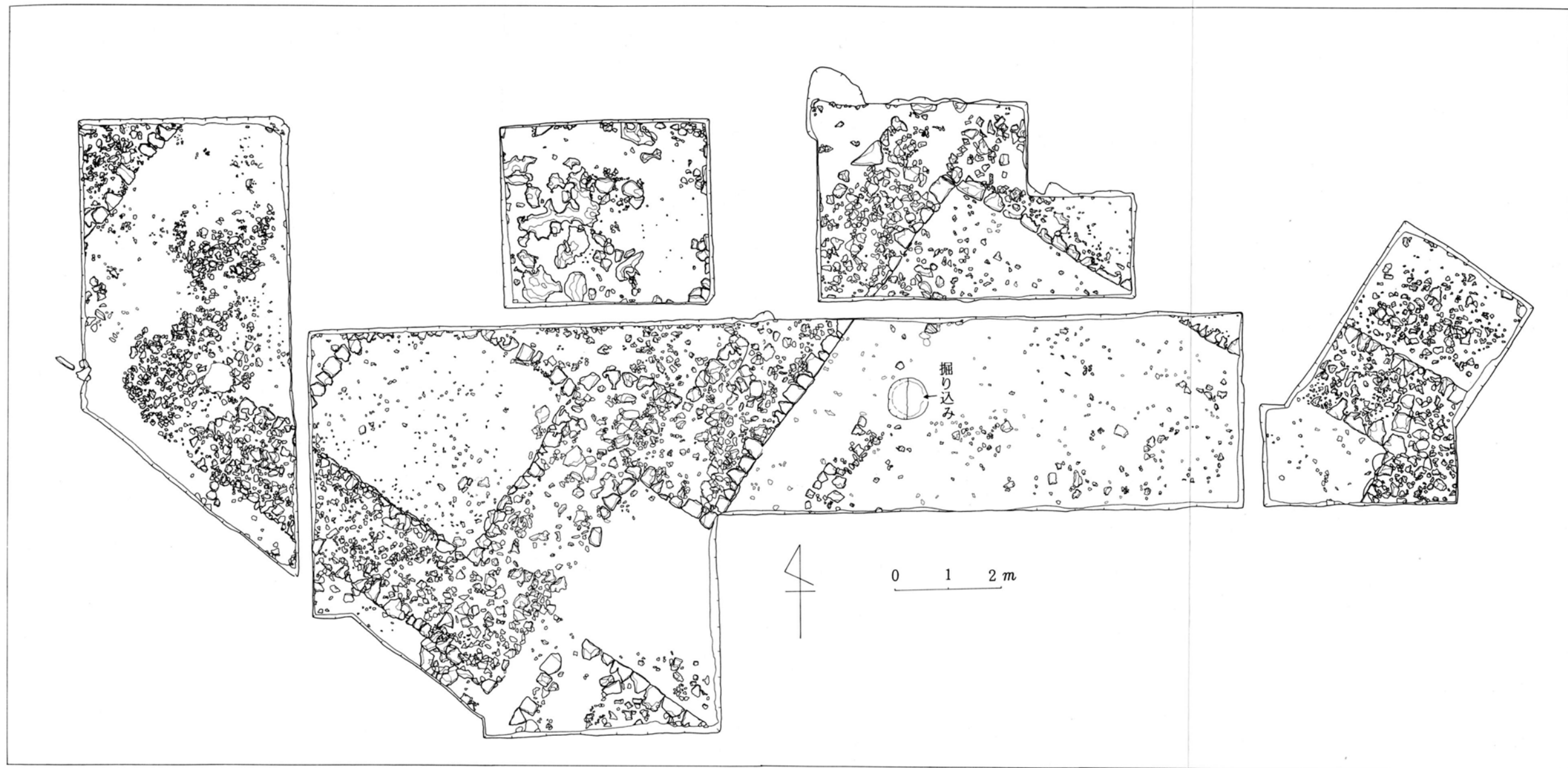
1 鉄製品

釘

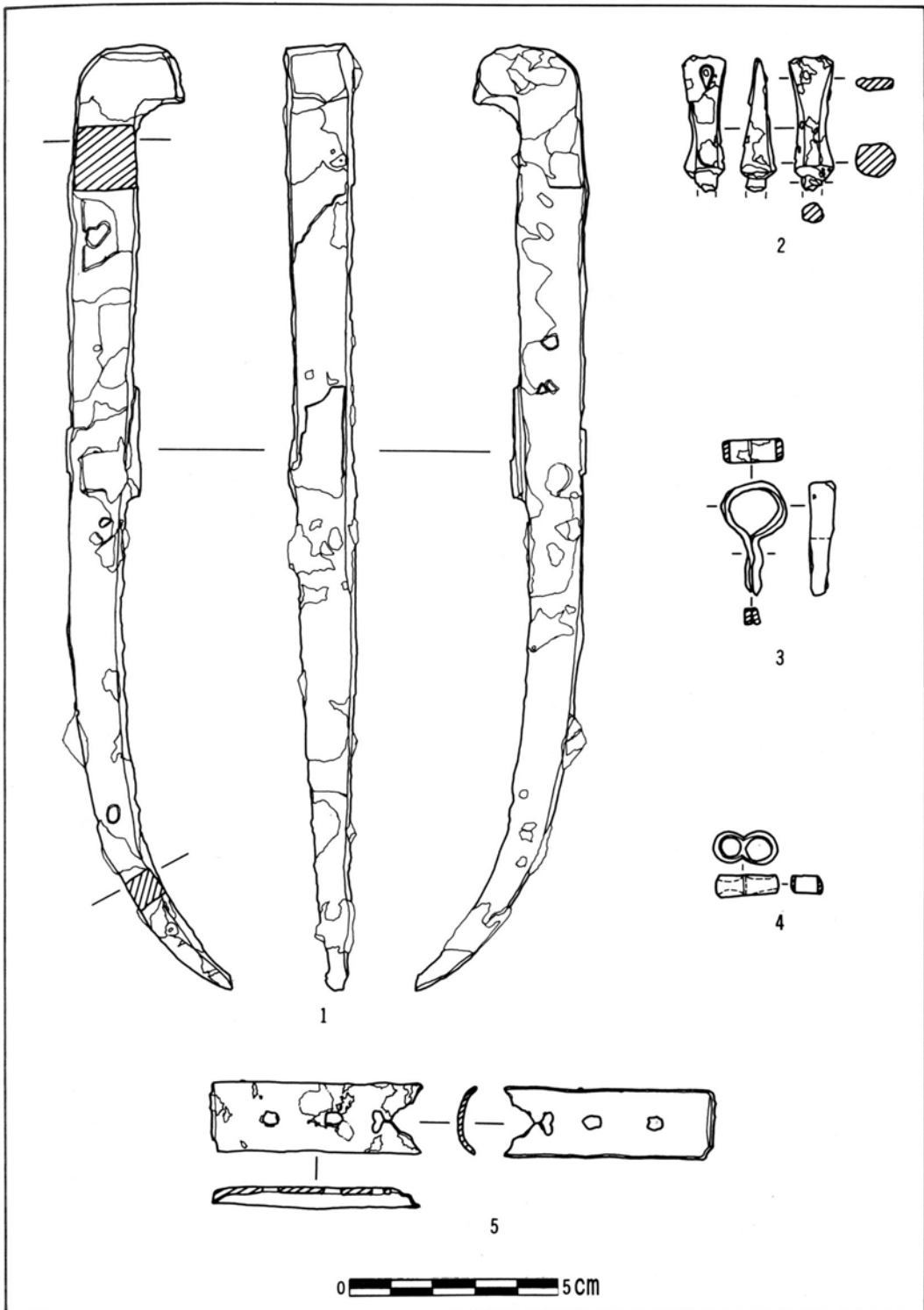
第5図1は、頭部がL字状に折れ曲がる角釘で、辺は頭部で約1.5cmを測る。全長は約23cmで、第2次調査出土の中では最も大きい資料である。重さは235gで、第2層30～40cmレベルの出土。

鋨

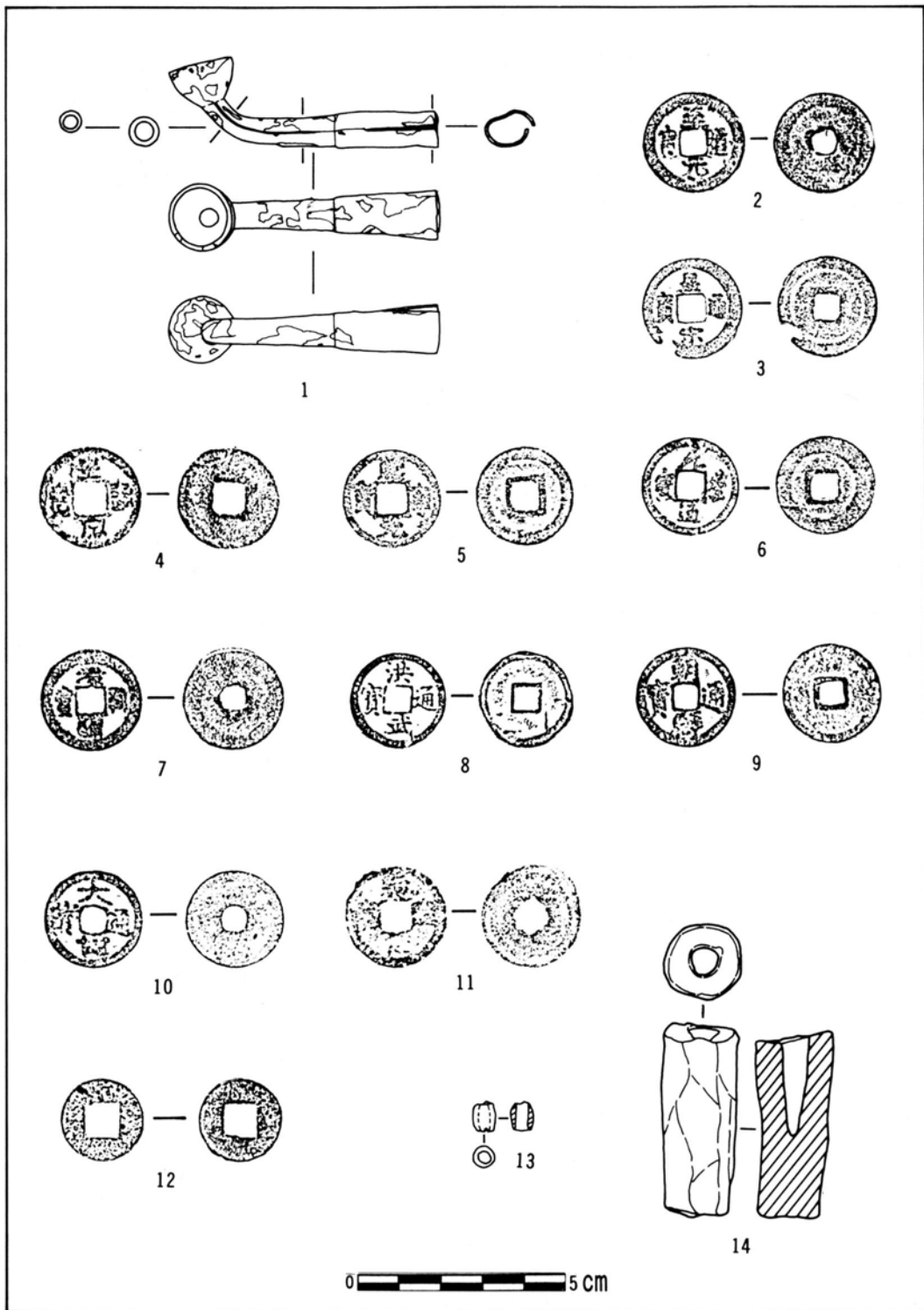
第5図2は有茎であるが、茎を欠出するものである。身の茎に近い所は隋円、刃に近い箇所では方形を呈する。刃は先端を欠くため形態は判然としない。現存最長は約3.3cm、幅は約1cm、厚さ0.9cm、重量5gで、第2層10～20cmレベルの出土である。



第4図 石壁実測図 (平面)



第5図 鉄製品（1・2），青銅製品（3～5）



第6図 青銅製品（1～12），玉（13），瓦質製品（14）

2 青銅製品

古 銭

特徴 挿図 番号	銭 名	直 径 (cm)	外縁の 厚 さ (mm)	残存重量 (g)	孔 径 縦×横 (mm)	初鑄造 年 代	備 考
第6 図2	至 道 元 寶	2.40	1.0	3.5	5.6×5.7	995	完形である。 文字は浅い
3	皇 宗 通 寶	2.40	1.1	3.3	6.1×6.2	1039	左下部の縁を 僅かに欠く。
4	〃	2.46	1.0	2.6	7.6×7.6	1039	全体に波状を 呈する。
5	熙 寧 元 寶	2.36	1.1	3.4	7.1×6.8	1068	文字は摩耗が 著しい
6	元 豊 通 寶	2.34	0.9	2.8	5.9×5.8	1078	完 成 品
7	元 祐 通 寶	2.43	1.2	4	6.2×6.4	1086	書体は隸書体
8	洪 武 通 寶	2.28	1.7	3.7	5.6×5.7	1368	文字は鮮明
9	朝 鮮 通 寶	2.38	1.3	3.6	5.6×5.6	1423	文字は鮮明
10	大 世 通 寶	2.34	1.3	3.7	5.6×5.6	1454	琉球大世王 尚泰久鑄造 (注1)
11	不 明	2.41	2.2	6.4	7.0×6.7	不 明	2枚重なって いる。2次的に 火を受けてい る(?)。
12	無 文 銭	2.14	1.4	2.8	7.6×7.6	不 明	

第5 図3は完成品で、上方に隋円形の輪を作って、下方で割りピン状を呈するものである。部分的に鍍金が認められることにより、本来は全面にわたり鍍金された製品と思われる。長さは約2.7 cm、幅約1.6 cm、厚さ約0.5 cm、重さ2.6g、板自体の厚さ約2 mmで第2層20-40cmレベルの出土である。

第5 図4も完成品で、平面観は8の字状、側面観が偏隋円状を呈する。僅かに鍍金のあとを残している。平面を基準に測定すると縦9 mm、横約1.5 cm、厚さ5 mm、重さ1.9gで、金具全体の厚さは約1.4 mmである。本標品は「甲冑」(注2)を見ると鞆の下部あるいは、上部で肩紐を鞆にかけた後に紐を絞る金具に類似する。

第5 図5は鎧の大袖あるいは胸板の境粧付に付けられる金物(冠板)と思われるものである。折れ曲った部分より先をやや欠くがほぼ完形で、鍍金を未だ鮮明に残している。びょう穴は2穴ある。

長辺 5 cm, 短辺 1.7 cm, 重さ 6 g, 板の厚さ 1.2 mm を測る。第 2 層 20～40 cm レベルの出土である。

第 6 図 1 は、雁首で半球状の煙草のつめ部と先の彎曲した管を組み合わせている。管の作りは片側止めで、管の中途には、中張らみの節もある。長さは約 6.5 cm, つめ部の直径は約 1.6 cm である。重さは 6.9 g で第 2 層 0～20 cm レベルの出土である。

3 玉 類

第 6 図 13 は、天然ガラスで作ったと思われる小玉で樽状を呈する。淡青色を呈し、厚さは約 6.8 mm, 径は約 5.2 mm, 重さは 0.3 g を測る。第 2 層 0～20 cm レベルの出土である。

4 土製品

第 6 図 14 は完形で、ややくずれた長円柱状を呈するもので、上方円面の中央には径約 6 mm, 深さ約 2 cm の穴が穿たれている。下方の円面は整えるが、上方円面は雑である。長さ 4.5 cm, 径 1.8 cm, 重さ 10.8 g で、第 2 層 0～20 cm レベルより出土した。

5 円形状製品

第 7 図 1・2 に図示した 2 点で、1 は釉褐陶器片、2 は瓦片を円形状に打ち欠いて成形している。打ち欠きは 2 点とも 2・3 箇所をのぞいて片側からである。1 は割れの角を未だシャープに残すが、2 は角が磨耗して本来の鋭さを欠く。1 は直径約 5.5 cm, 厚さ約 9 mm, 重さ 35 g, 第 2 層 0～20 cm レベルの出土である。2 は直径約 4 cm, 厚さ 1.3 cm, 重さ 25 g で第 2 層 0～20 cm レベルの出土である。

6 瓦

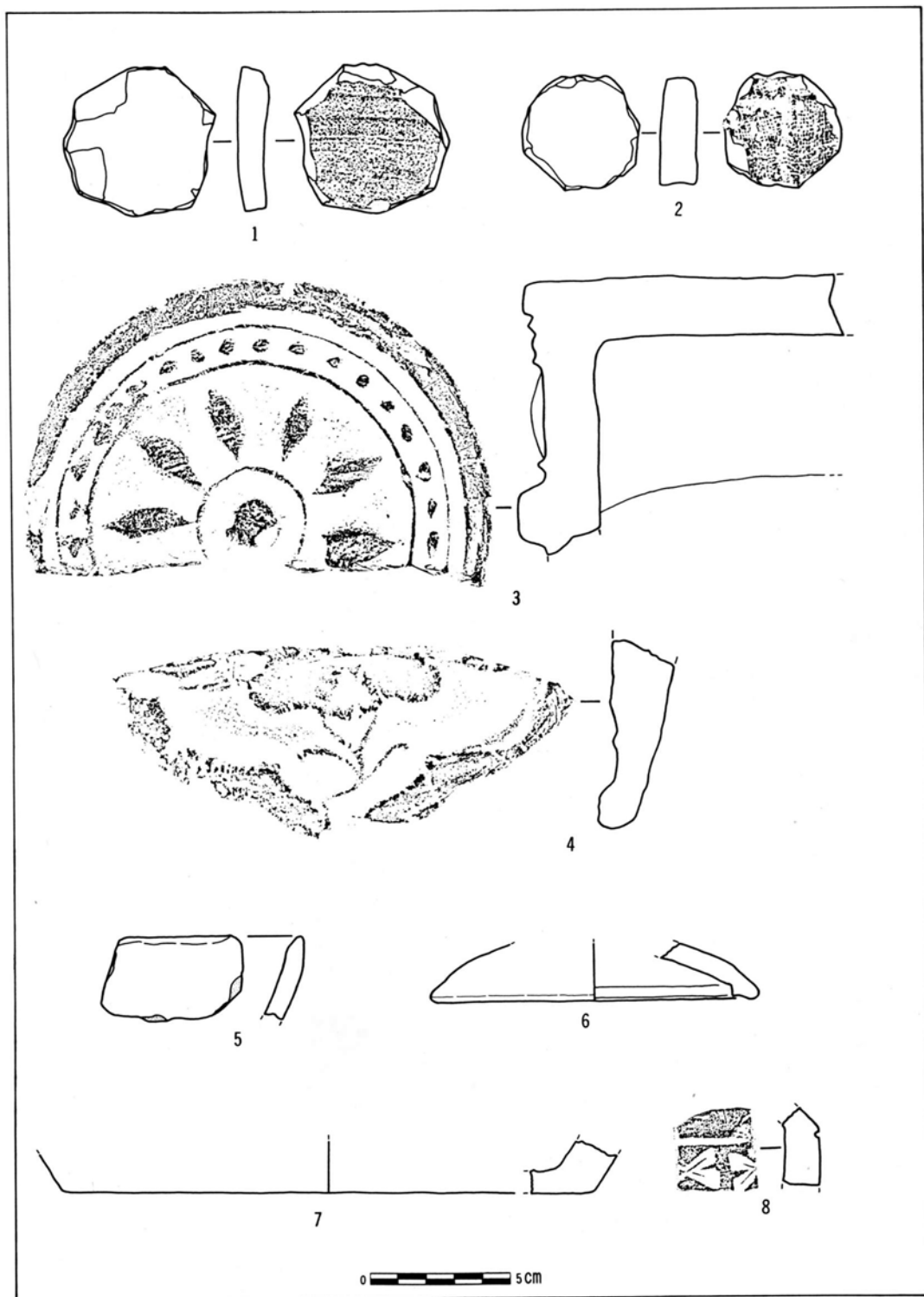
第 7 図 3 は軒丸瓦の半欠品で、瓦当の径は約 16 cm ある。瓦当の文様は中房界線内の乳母状の蓮子（一つ）を中心に、内区には肉厚レンズ状の花弁が 6 つ認められる。外区円縁には隋円形の殊文が配されているが、所によっては円縁と接するものもある。瓦当縁と丸瓦の凸面がスムーズになるように接合している。丸瓦の凸面はヘラ削りである。色調は黄褐色であるが、胎土は青灰色で、サンドウィッチ状を呈する。焼成は普通である。第 2 層 0～20 cm レベルより出土。

同図 4 は軒平瓦の瓦当部破片で、瓦当は垂尖形を呈する。瓦当の縁に外区を作り、内区には花文を配している。しかし、破片の為、文様構図は判然としない。色調は橙色で、胎土に赤色粒を混入する。焼成は良い。第 2 層 0～20 cm レベルより出土。

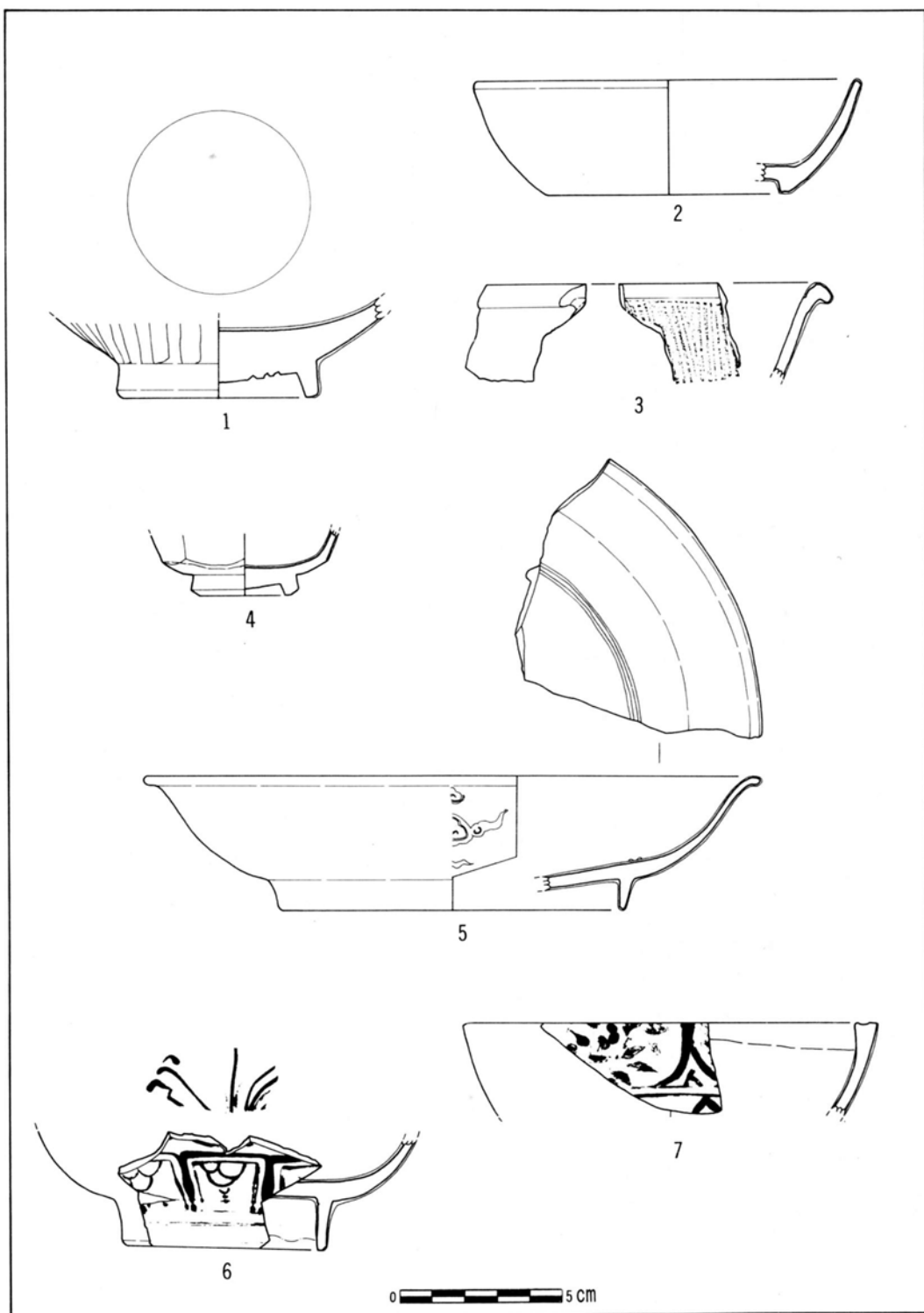
7 土 器

第 7 図 5 は口縁部破片で口唇は舌状を呈する。器面の調整は内面で入念なナデを施すが、外面は雑で凹凸のある面になっている胎土には石英・石灰質砂粒・赤色粒を混入する。器色は橙色で、焼成は良い。第 2 層 0～30 cm レベル出土である。

同図 6 は小皿をふせた器形が推察される蓋で、径は約 12 cm を図る。胎土には石英の砂粒を多量に含む。器色は器面で淡黄褐色、胎土は灰色のサンドウィッチ状を呈する。器面をルーペ（25 倍）で観察す



第7図 円形状製品（1・2），瓦（3・4），土器（5・6），須恵器（7），
瓦質土器（8）



第8図 青磁（1～3），白磁（4・5），青花（6・7）

ると器面の凹に朱に類するものが見られることから表裏面に朱塗りされていたことも考えられる。焼成は良好で第2層0～20cmレベルの出土である。

8 須恵器

第7図7は底部の破片で、推算底径は約19cmを測る。器厚は胴部下方で約1.5cmと厚いが、底では0.8mmと薄い。色調は青灰色で、焼成は良好である。第2層20～30cmレベルの出土。

9 瓦質土器

第7図8は体部の小破片で、1条の沈線と直緯文のスタンプが見られる。色調は青灰色で、焼成は良い。第2層0～20cmレベルの出土である。

尚、本標品のスタンプ文に類似するものが、大宰府史跡第67次調査出土のもの（図版30の25）（註3）に見られる。

10 青 磁

第8図1は碗の底部で、体部下方にはへう彫りの蓮弁文、内底には圈線が見られる。釉色は緑色で畳付まで施釉する。釉には細かい貫入が認められる。高台は竹節高台で、外底には削り痕が残っている。底径は約6.2cmで第2層の出土である。

同図2は小形の皿で、体部下方より外彎する。底部は碁笥底である。釉は薄い緑色で全面に施釉する。文様及び貫入は見られない。器高は3.5cm、口径約12cm、底径7.6cmを測る。第2層0～30cmレベルの出土である。

同図3は端部を折り曲、玉縁状の口縁を作るものである。内面には摺鉢状の凹線が縦位に見られる。釉はオリーブ色で、内面端部及び外面に施釉する。第2層0～20cmレベルの出土である。摺鉢的な利用が推察される。

11 白 磁

第8図1は八角盃の体部下方より底部にかけての資料である。釉は体部及び内部に施釉するが、体部下方より高台は露胎である。釉・磁胎とも乳白色を呈する。底径は約3.2cmで、第2層0～20cmレベルの出土である。

同図5は端反り皿で、口径約19cm、底径約10.8cm、器高約4cmを測る。体部には白土の如意雲状の浮文、内底にも白土の界線が2条認められる。釉・磁胎とも乳白色を呈するが、磁胎には黒色の斑点も認められる。釉は全体に施釉するが畳付では掻き取っている。第2層0～20cmレベルの出土である。

12 青 花

第8図6は高い高台を作る腕の底部と考えるものである。文様は体部下方にラム式蓮弁、高台には4条の界線が認められる。内底にも大きな菊花文と界線が見られる。釉は高台内側の畳付近くをのぞいて全体に施釉するが、畳付では釉を掻き取っている。底径は約6cmで、第2層20～40cmレベ

ルの出土である。

第8図7は碗形様の器形を呈するもので、体部外面には唐草文が認められる。釉は外面体部及び内面に施釉するが、口唇部は露胎である。釉・磁胎とも乳白色を呈する。口径は約12.8cm、第2層20～40cmレベルの出土である。

13 黒釉陶器

第9図1・2とも天目茶碗と推察されるもので、1は口縁部破片、2は底部の破片である。1は凹面を僅かに作って外反するもので、端部は舌状を呈する。釉は端部でつやのない赤茶色、体部は黒色を呈する。胎土は淡黄色である。第2層20～30レベルより出土。

2は円盤状の高台を作るもので、外底を輪状に削っている。釉は表面で赤茶色を呈するが、素地は黒色である。体部下方より外底は露胎で、胎土は薄い灰褐色を呈する。第2層より出土。

14 褐釉陶器

第9図3～5に図示した3点は口縁部破片で、口径は、推算約16cmを測る。口縁の断面はくずれた方形状を呈する。釉色は褐色、胎土は薄い灰色を呈する。第2層0～20cmレベルの出土である。

同図4は肩の張る壺形が推察される口縁部破片で口径は約16cmを測る。口縁の形態は前記3と類似する。釉色は淡い褐色を呈するが、磨耗のため器面よりだいぶ禿ている。胎土は淡い黄土を呈する。第2層20～40cmレベルの出土である。

同図5は底径約20cmを測るもので、器面は内外面とも波状を呈する。釉は茶褐色で外面の体部下方まで施釉するが、器面の凸部では部分的に禿落ちている。胎土は橙色及び薄い灰色を呈する。底面は中央へかけてやや上げ底状を呈するが、僅かに上って先を欠くため判然としない。底面は全体に細かい凹があってサラサラする。第2層20～40cmレベルの出土である。

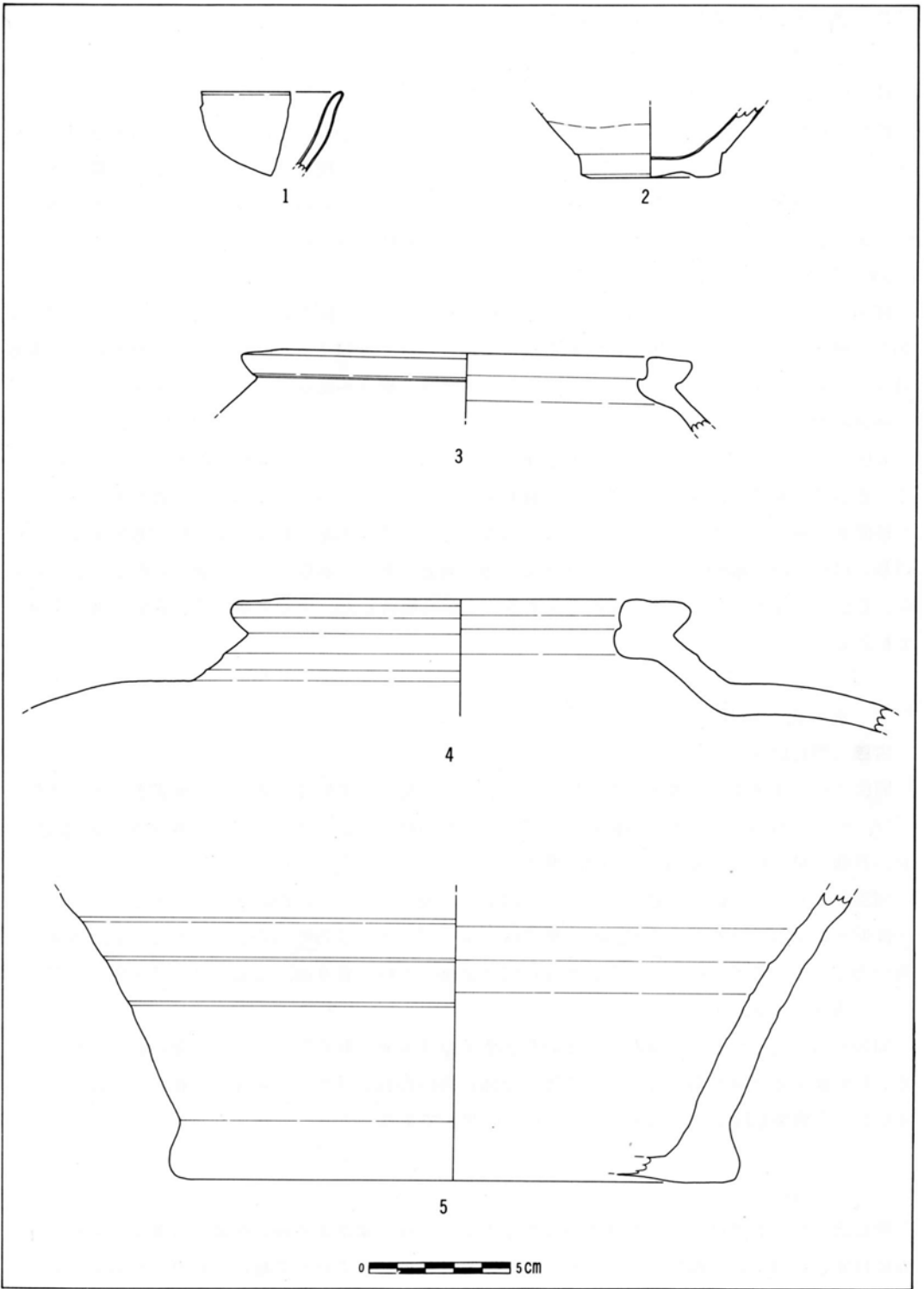
C 遺 構 (第10図)

a 溜 め 井

展望台広場の南側にあたる地域の礫層80cm下より発見された。遺構は平面形が長方形を呈する様に50cm台の石灰岩切り石を組んで成形してある。その規模は縦位4m、横位2m、深さ40cmをはかる。遺構内の基底及び石組の部分には粘土がはりつけられ、基部には河原の円礫が認められる。調査中、雨水が溜り、充分保水力があることが確認された。

本遺構の西側から南側には階段が存在し、又、東側には黄褐色のコーラルが敷かれている。これらを含む遺構は先述の石塁と軸の方向及び配置が合致し同一時期に機能したことが考えられる。

一方、当記溜め井遺構の東側にはコーラル敷上に石灰岩石積みがなされ時期差のみられる遺構が存する(第11図)。この遺構断面には、基底部直径60cm、上部直径90cmの円筒状の石積みがなされ、内部から若干の遺物も得られている。粘土ばりは認められない。又、当遺構の南側にもコの字状に面石を有した石垣が存在する。これらを構成する上部の礫群は一次調査では基壇として判断したものである。



第9図 黒釉陶器（1・2），褐釉陶器（3～5）

D 遺物（溜め井に伴なう遺物）

1 鉄製品

釘（第12図1）

鉄釘は形状及び身の大きさの大小さまざまが出土している。ここでは、本区で最も大きいものを選び図示した。1は頭部が逆し字状に折れ曲っているもので、横断面は方形を呈し、頭部で最も厚く先端にかけすばまる。現存形は先端部に移行するにつれ著しく弧状に曲っている。長さ13cm、厚さ1cm、重さ42gで、第2層0～20cmレベルの出土である。

鋸（第12図2）

同図2は建材の合せ目をつなぎとめる鋸と思われるもので、両端の曲った大釘部分の欠次資料である。横断面は各辺がほぼ等しい方形を描き尖端にかけてすばまるが、特に端部はやや鋭い先を作り出している。現存長6.8cm、厚さ1.4cm、重量67gで等2層0～20cmレベルの出土である。

用途不明（第12図3）

同図3は長二等辺三角形の先端を底辺までまげた流線形の輪に半円形状の輪をつないだものである。底辺の両角度には両辺から延びる部分もあるが、折れているため全体の状況は判然としない。

横断面でみると全体は方形を呈するが、つながっている半円形の輪の断面は隋円形である。現存の長さは約5cm、幅約2.8cm、厚さ0.9cm、重さ48gである。本標品は現代遺物になることも考えられるが、作りからして古式の様相を呈することから照合した。用途考察は類似資料の増加を待つて検討したい。

2 青銅製品

古銭（第12図4～6）

同図4は寛永通寶で、裏面の上位には「小」の字が配されている。表面の左側部分に強い衝撃を受け、やや波打っているものの保存は良好で銭名も明瞭である。直径2.2cm、外縁厚さ1mm、重量2.4g、孔径（縦×横）6.7mm×6.9mm、第2層20～40cmレベルより出土。

同図5・6の2点は無文銭で、5は片面は弱い凹面、もう一方の面は弱い凸面を呈する。方形の孔は凹面側では円味を呈するが、凸面側ではシャープな角を残している。この点より孔は片側より強い力で穿ったことが推察される。現存径は2.2cm、外縁厚0.9cm、重量1.9gで第2層20～40cmレベルの出土である。

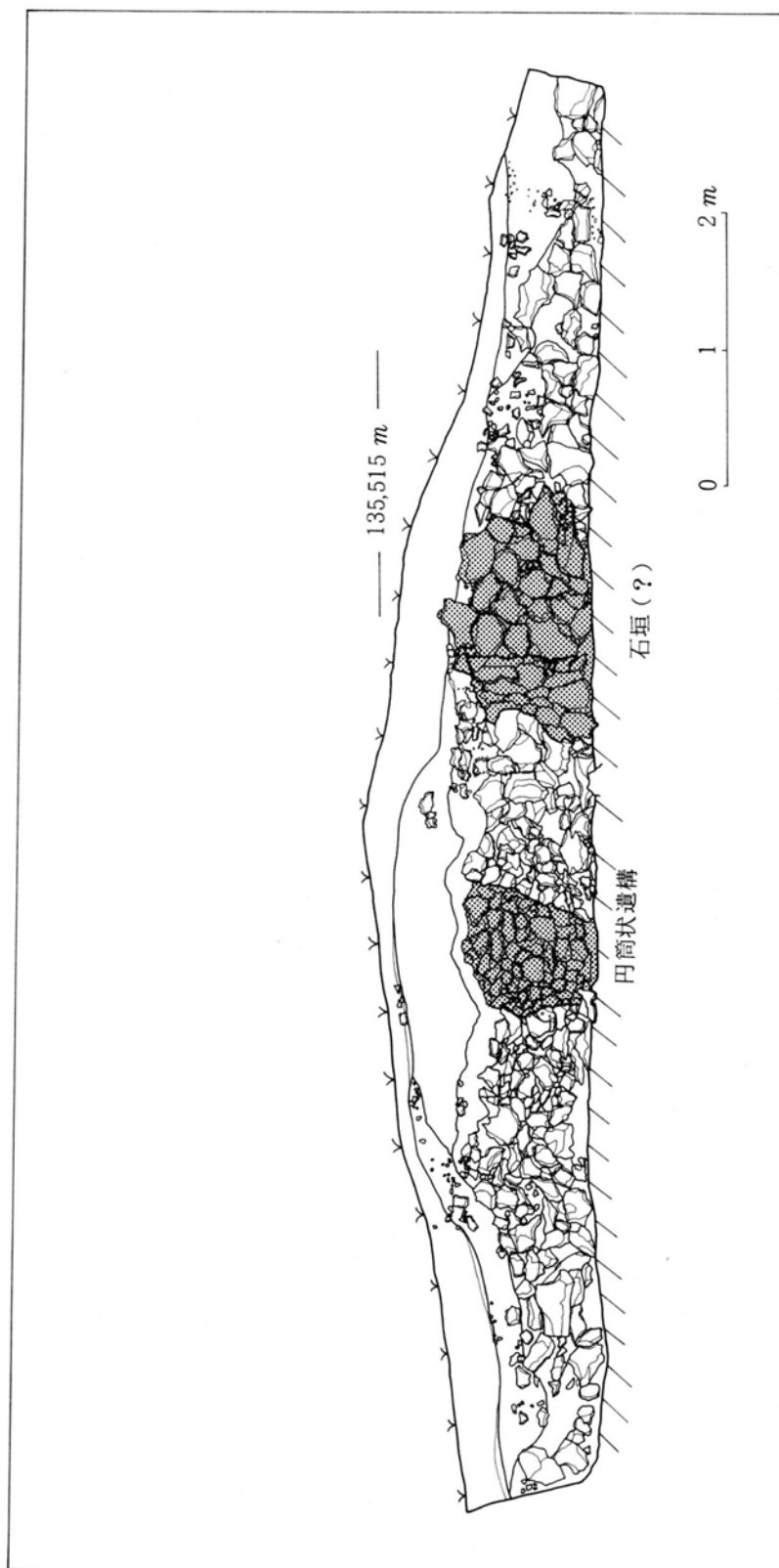
同図6は前記した5より径がひとまわり小さく厚さも薄いもので、一般的に鳩目銭と統称されている資料に属すると考える。作りはやや雑で全体に弱い波状を呈する。現存の直径は1.8cm、外縁厚さ0.6cm、重量0.7gで第2層20～40cmレベルの出土である。

3 瓦

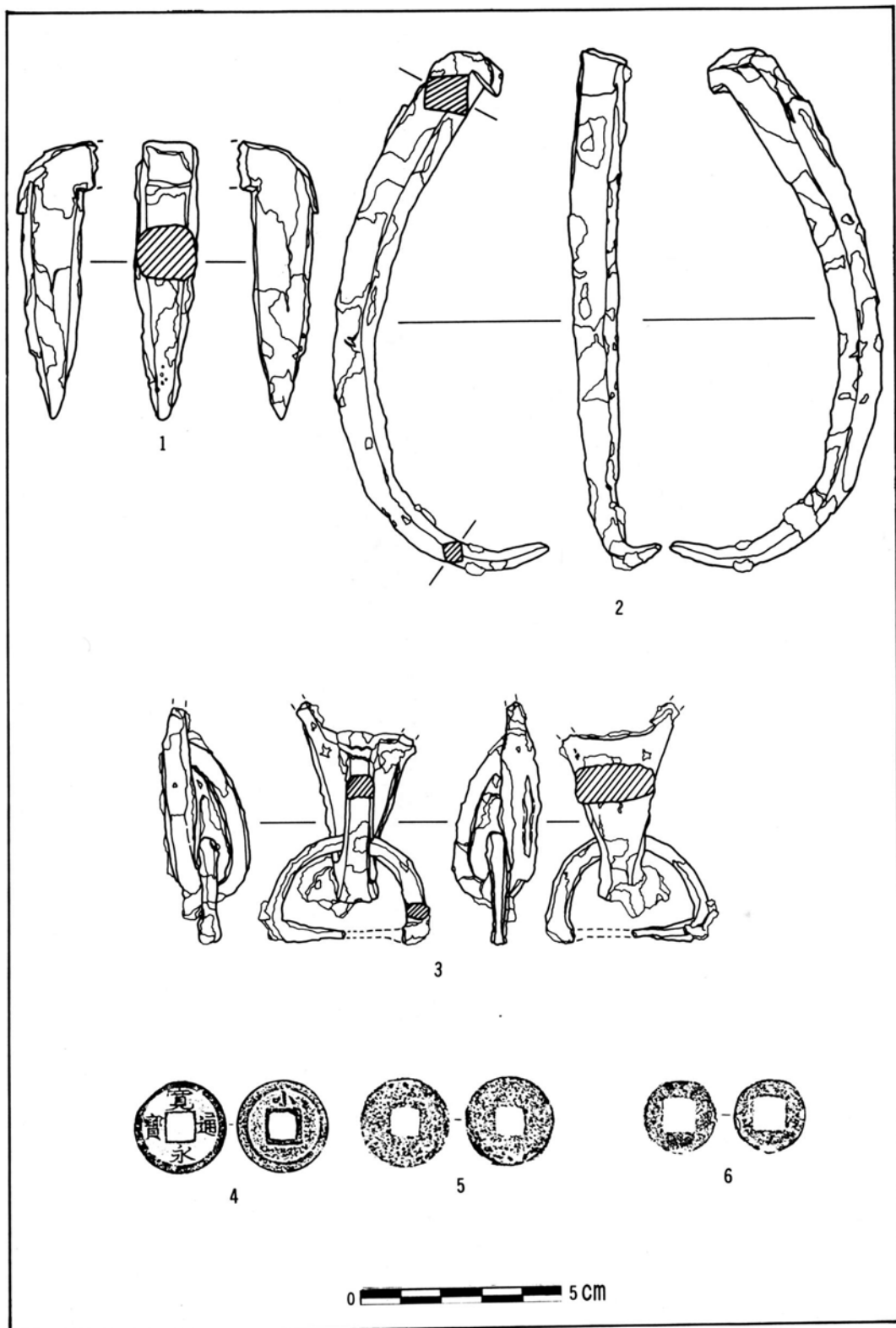
第13図1は平瓦で凸面には全体に雑な撫で調整、下縁に横走る細い凹線が2条認められる。凹面には布目のほかに、桶巻き作りの粘土板の貼り付け部分と思われる縦位の貼り付け痕も認められる。側面には割り痕が見られる。色調は部分的に灰色を呈するが全体は橙色で、焼成はやや悪い。胎土には灰褐色粒を混入する。現存の長さは約26cm、幅約17cm、厚さ2.1cm、重さ1120gで第2層0



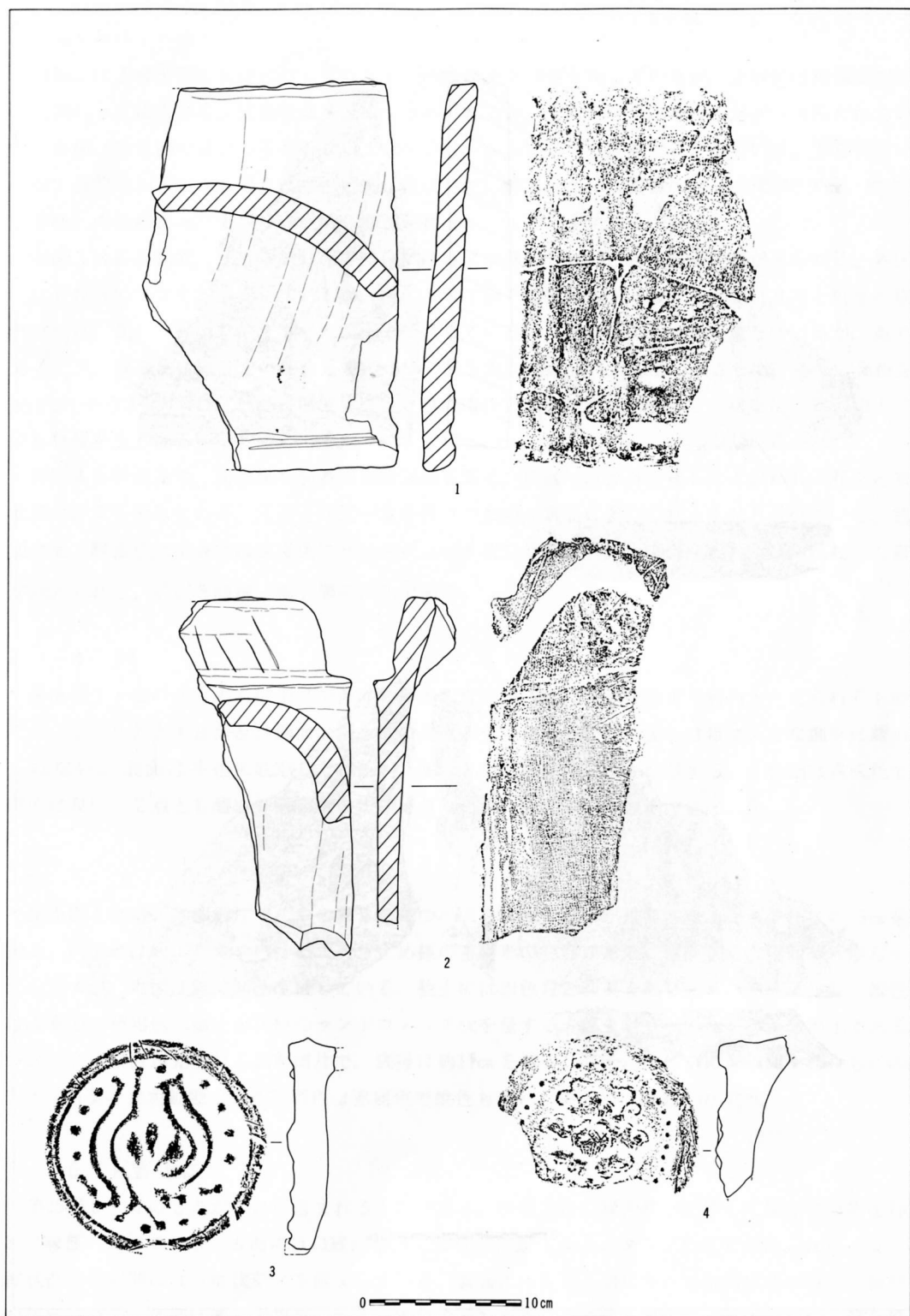
第10図 井戸状遺構



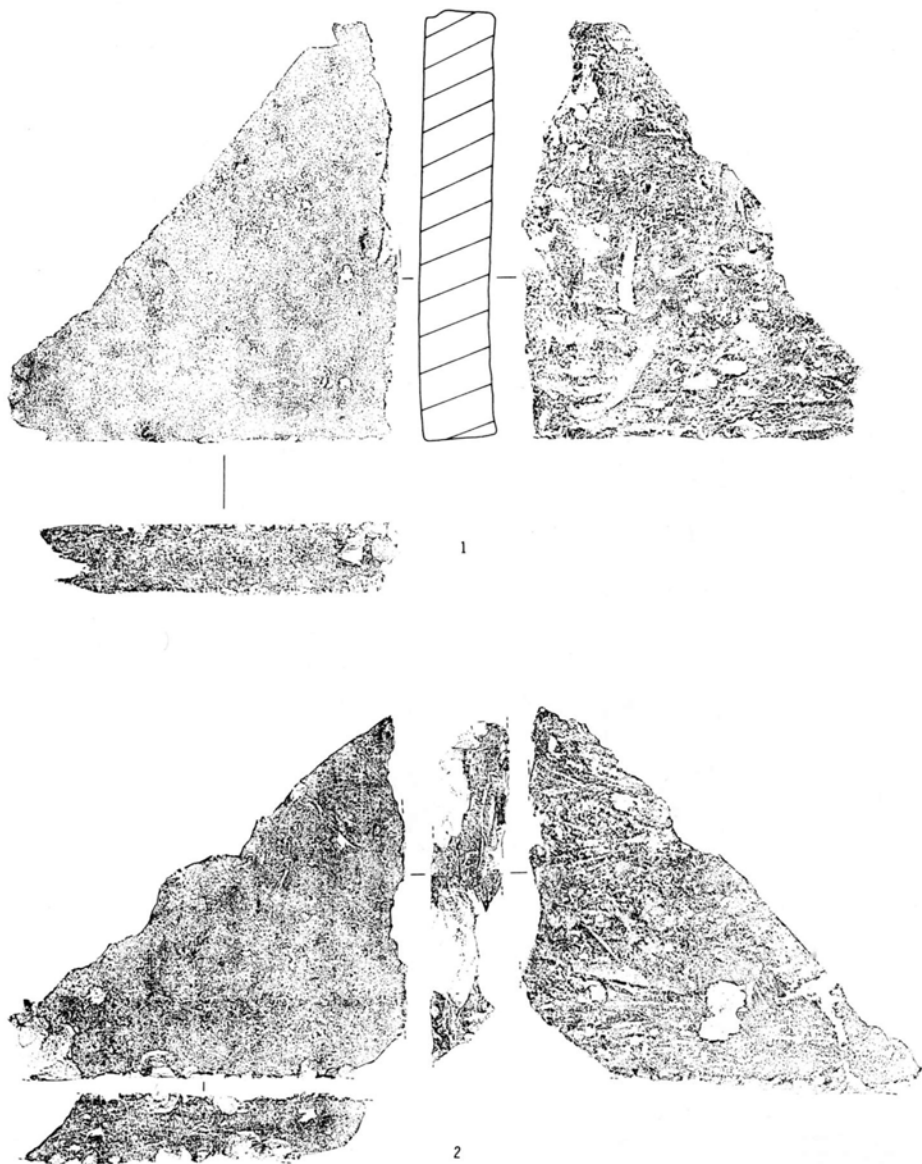
第11図 東壁側の遺構図 (側面)



第12図 鉄製品 (1～3) , 青銅品 (4～6)



第13図 瓦 (1~4)



第14図 埴

～20cmレベルより出土。

同図2は玉縁を作る有段式の丸瓦である。凸面はナデ調整を施しているが、上縁には指幅の凹が2条隣接して横走する。凹面には布目痕が認められるが、玉縁部分では布目痕がダブリみだれている。側面は雑な割り痕がみられるが、玉縁部分はシャープな切り込みで成形している。玉縁凸面には鋭い斜位のキズが4本見られる。色調は青灰色で、焼成は良い現存長22.5cm、幅10.2cm、厚さ2.5cm、内径約10cm、重さ800gで第2層20～40cmレベルの出土である。

同図3は軒丸瓦で、瓦当径約14cmで内区には花文が簡略化したと思われる文様が見られる。外区には豆粒程の珠文を20個配しているが、所によって隣の珠文と接するものもある。瓦当と丸瓦の取り付けは、瓦当の縁よりやや下った箇所で接合している。瓦当の裏面はナデを施しているが、雑である。又、裏面には丸瓦との接合近くに3つの指圧痕が認められ、左手の人さし指、中指、薬指をあてがうとうまくなじむ。色調は面で青灰色、身の中は黄褐色のサンドウィッチ状を呈する。胎土には赤色粒を混じえる。第2層の出土。

同図4も軒丸瓦で、瓦当径も前者同様約14cmを測る。内区には牡丹を模したと思われる花文と米粒程の珠文を配している。瓦当と丸瓦の取り付けのため、裏面に多くの粘土を貼り付けている。色調は面で暗褐色、中身では灰褐色のサンドウィッチ状を呈する。胎土には灰色粒及び黒色粒（石質）が認められる。前記3同様、第2層の出土である。

4 博

第14図1・2の2点とも破損品で形は判然としないが、1は方形を呈する資料と考えられるものである。両者とも表面及び側面は磨き様の光沢が見られるものの、裏面は雑で入念な調整は認められない。表面は平坦に成形しているが、裏面及び側面は弱い凹面を呈する。色調は青灰色で焼成は良い。2点とも溜め井遺構区の東壁より露出した石積み内の出土である。

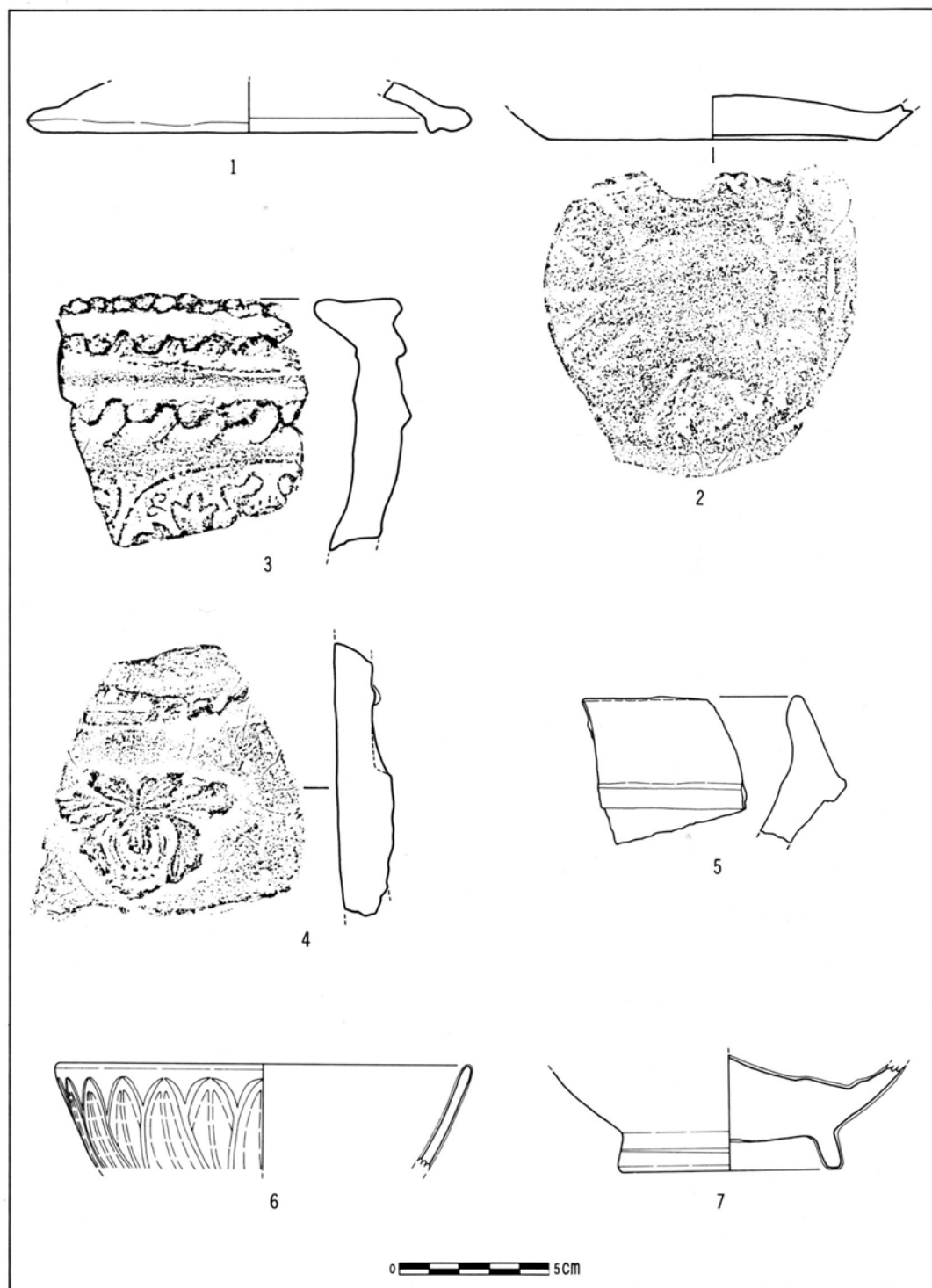
5 土 器

第15図1は蓋の袖部破片で、やや深さを持つ小皿を状せな器形が推察される。蓋の径は約15cmを測る。内面には縁よりやや内側にすべり止め様の三角形の凸部がある。器面調整は内面で入念なナデを施すが、外面は雑で凹凸を残している。胎土には赤色粒と石英を混じえる。焼成は良好。器色は表裏面で橙褐色、胎土が灰色のサンドウィッチ状を呈する。第2層0～20cmレベルの出土である。

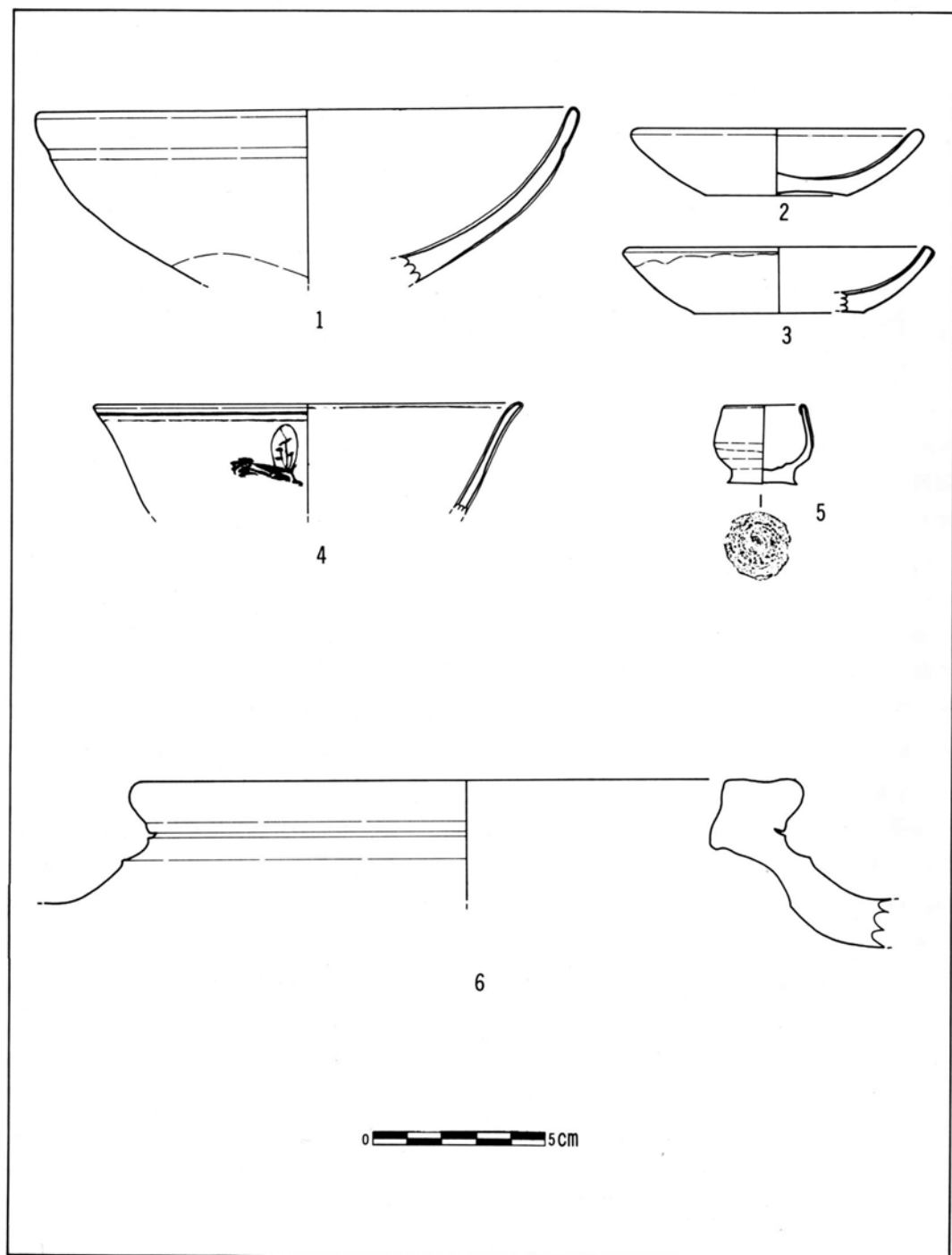
同図2は葉痕が見られる底部破片で、底径は約11cmを測る。胎土には僅かに赤色粒を含むものの、主体は石英と黒色鉱物である。器色は赤褐色で焼色も良い。第3層（礫層）の出土。

6 瓦質土器

第15図3・4の2点がこれに含まれるものである。同図3は口縁内部が肥厚して幅広の口唇を作る口縁部の破片である。表面には口縁に沿って波状凸帯が3条とスタンプの花文が見られる。又、波状凸帯の谷間には爪形状刻文を施文している。裏面には花文と対にあたる箇所に手のひらの根痕が認められる。色調は器面で黒色、胎土が灰色のサンドウィッチ状を呈する。焼成は良好。第3層（礫層）の出土。



第15図 土器（1・2），瓦質土器（3・4），陶器（5），青磁（6・7）



第16図 白磁（1～3），青花（4），褐釉陶器（5・6）

7 陶 器

第15図5に示した1点で、備前焼の摺鉢の口縁部破片である（註4）。口縁は逆くの字状に折曲し、外面の折曲には断面方形の凸帯が横走する。胎土には砂粒を含むが、5mm前後の礫も僅かに見られる。器色は部分的に暗褐色を呈するが全体は橙褐色で、焼成は良い。なお、前記凸帯の下方には重ね焼き痕（色の変化及び粗土の付着）が観察できる。第2層20～40cmレベルの出土である。

8 青 磁

第15図6は碗の口縁部破片で片切彫りの間蓮弁文を描くもので、蓮弁には盛りのよわい鎬が見られる。釉色は薄緑で貫入は認められない。胎土は灰褐色を呈する。焼成は良い。第3層（礫層）の出土である。

同図7は底部の資料で内底には、同心円状の瞭が見られる。高台は高台の根から畳付にかけ、やや末広がりになっている。高台外面には圈線を描く。釉は薄い緑色で外底まで施釉するが、外底では輪状に掻き取っている。釉には粗い貫入が見られる。焼成は良い。第2層0～20cmレベルの出土である。

9 白 磁

第16図1は口縁より体部下方にかけての破片で図上復元を試みた。外彎する碗で、口径は約16cmを測る。体部の上方には横走する浅い凹線も見られる。釉は内面に全て施釉しているが、外面は体部下方より露胎になっている。釉色は乳白色、胎土は灰白色で黒色粒を混じえている。貫入は見られない。第2層0～20cmレベルの出土である。ビロースク・タイプ（註5）に含まれるものかと考えられる。

同図2・3はほぼ直線的に開く小皿で約1.5cmの深さを有する。2は僅かにあげ底になっているが、3は判然としない。2は口径9.6cm、底径4.2cmで高さは約2cm、3は口径約9cm、底径約5cm、高さ約2cmを測る。釉は内面に施釉するが、外面は体部・底部とも露胎である。同タイプは今帰仁城跡でも検出され灯明皿として報告されている（註6）前記2も口縁部にスミが付着していることから同様の使用が想定される。2は第3層（礫層）、3は第2層0～20cmレベルの出土である。

10 青 花

第16図4は碗の体部より口縁部にかけての資料である。文様は外面で口縁部に2条の界線、体部上方には深海魚状のグロテスクな魚文が3匹認められる。内面には口縁部に界線が1条配されている。釉は乳白色で部分的にポーラスが認められる。呉須の発色は淡い蓋色を呈するが、魚文には濃淡をつけている。第3層（礫層）の出土である。

11 褐釉陶器

第16図5はミニチュアの盃で口縁部の半分を欠くが、器形復元が可能なものである。径の最大は体部下方で、そこから口縁部まで直線的に内傾する。釉は外面で体部下方まで、内面では端部にの

み施釉している。釉は茶褐色で、胎土は黄褐色を呈する。口径は約2.5 cm、器高約2.4 cm、底径は約2 cmを測る。第3層（礫層）より出土。

同図6は肩の張る壺形が想定される口縁部破片で、口径は推算約19.8 cmを測る。口縁断面はくずれた方形状を呈する。釉は褐色を呈するが、磨耗と石灰分の付着が著しい。胎土は赤褐色を呈する。

第2節 松林地区

A 遺構 (第17図)

この遺構は石畳と石垣を組み合せたと思われるもので、上面の一部がすでに地上に露出していたため、今回の発掘対象地区に含めた。遺構の幅は約1.5 mで長さは南北に約12 m、東西には約15 m逆L字状を呈する。又、前記、石畳の北側に位置する岩（露頭岩塊）と結ぶ敷石もある。

尚、南北に走る敷石の東側と東西に走る敷石の中央及び岩に結ぶ敷石の中途には、ある程度の高さを持っていたと思われる石垣の根石も認められる。敷石の作りは外縁に約30 cm前後の面取りした石（石灰岩）を配し、中には約10 cm前後の石灰岩を敷き積めている。

付近には、約40 cm方形の石を単位とする石列（約3.5 m）や岩（露出岩塊）に西側より結ぶ石畳状の遺構などが認められた。又、石畳状遺構の下方には時代を異にする礎石も発見されている。

B 遺物

1 鉄製品

鏃

第18図1は柄の一部を欠くがほぼ全形が窮えるものである。鏃で一部ばう張しているものの、刃の部分で偏隋円、柄に近い所では隋円を呈する。刃は直刃で鋭さを欠く。全長約8.8 cmで幅1.1 cm（刃幅）、厚さ1.2 cm、重さ15 gで、第2層の出土である。

釘

第18図2は、先端部を欠く、頭部の資料である。頭部は未だ折れ曲っておらず、傾斜する頭部を残している。現存長約6 cm、幅約0.6 cm、重さ6.5 gで第3層の出土である。

2 青銅製品

古銭

本区での古銭の出土は第18図3に示した1点で縁の一部を欠くが、ほぼ完形の太平通寶である。石灰分が一部に付着しているものの、銭名は明瞭で判読可能である。径は約2.4 cm、厚さ約1 mm、孔は横6 mm、縦6 mm、重さ2.5 gを測る。初鑄年代は西暦977年で、第2層の出土である。

カンザシ

第18図4の1点で、やや変形しているが、完成品である。頭部には耳かき状の縦長隋円部を作り、竿の部分は六角形に形成する。しかし、竿の六角形は中途よりずらせている。先端は角錐状を呈する。全長は約11.5 cm、厚さ2.5 mm、重さ4.7 gで、第1層の出土である。

用途不明

第18図5はたる状を呈するもので、片面に漢字の五・六状の浅い線彫りが認められる。作りは全体に丁寧である。最大径1.7cm, 厚さ1.2cm, 重さ18gで第1層より出土。

3 円形状製品

第20図3・4とも瓦の破片を利用したもので、同図3は凸面からのみ打ち欠き成形している。直径は約7cmで厚さは約1.5cmを測る。色調は灰色で、第1層の出土である。

同図4は両面より打ち欠いて成形しているものである。直径は約5cmで、厚さは約1.5cmを測る。色調は凸面でやや赤味を呈するが、全体は灰色である。第1層より出土。

4 瓦

瓦は本区西側の拡張トレンチの落ち込みより集中的に出土した一括資料である。以下、特徴的な資料を略述する。

第19図1は平瓦でサイズがほぼ窺えるものである。凸面は上下を横ナデ、中は縦ナデ調整で成形している。凹面には布目・模骨の板を結ぶ縄痕・粘土板のつなぎ痕などが認められる。又、両側面には割り痕が残っている。色調は灰色で、焼成は良い。長さ約24cm, 幅約23cm, 厚さ15cmで第2層の出土である。本標品より模骨の径をだすと、下方約36cm, 上方約34cmで、模骨の約4分の1に近いことから4つ割りが推察される（径の推算に焼成の時の縮尺率を含めてない）。

第19図2・3は有段式の丸瓦である。2はサイズが窺えるもので、3は釘穴が見られる資料である。

2は長さ約31cm, 幅約14cmを測るもので、凸面はナデ調整で成形している。凹面には布目と粘土板のつなぎ痕が認められる。側面には割り痕が残っている。玉縁裏面の部分には鋭いカッティングが見られる。内径は約12cmを測ることから模骨はそれに焼成の縮尺率を加えたものになると考える。

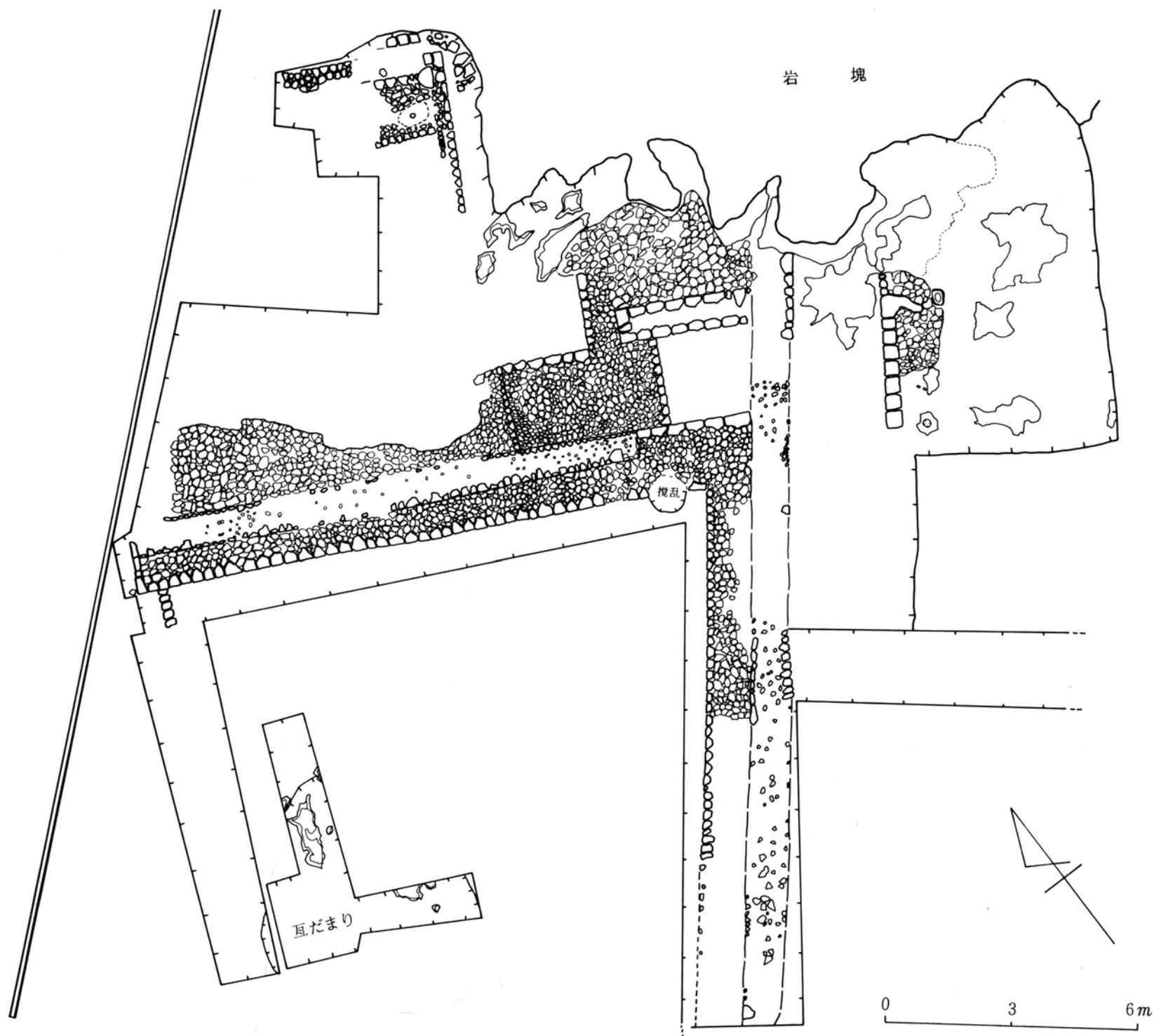
3は前述したように釘穴がもうけられたものである。前者2は玉縁の端部を円味に成形するが、本標品は角を作るものである。穴は凸面より一方的に穿っている。

側面は片側で平坦に成形するが、もう一方は割って後に削って平坦にしているが、末だ、凹を多く残している。玉縁裏のカッティングは雑である。内径は約10.4cmを測る。第2層0-20cmレベルの出土。

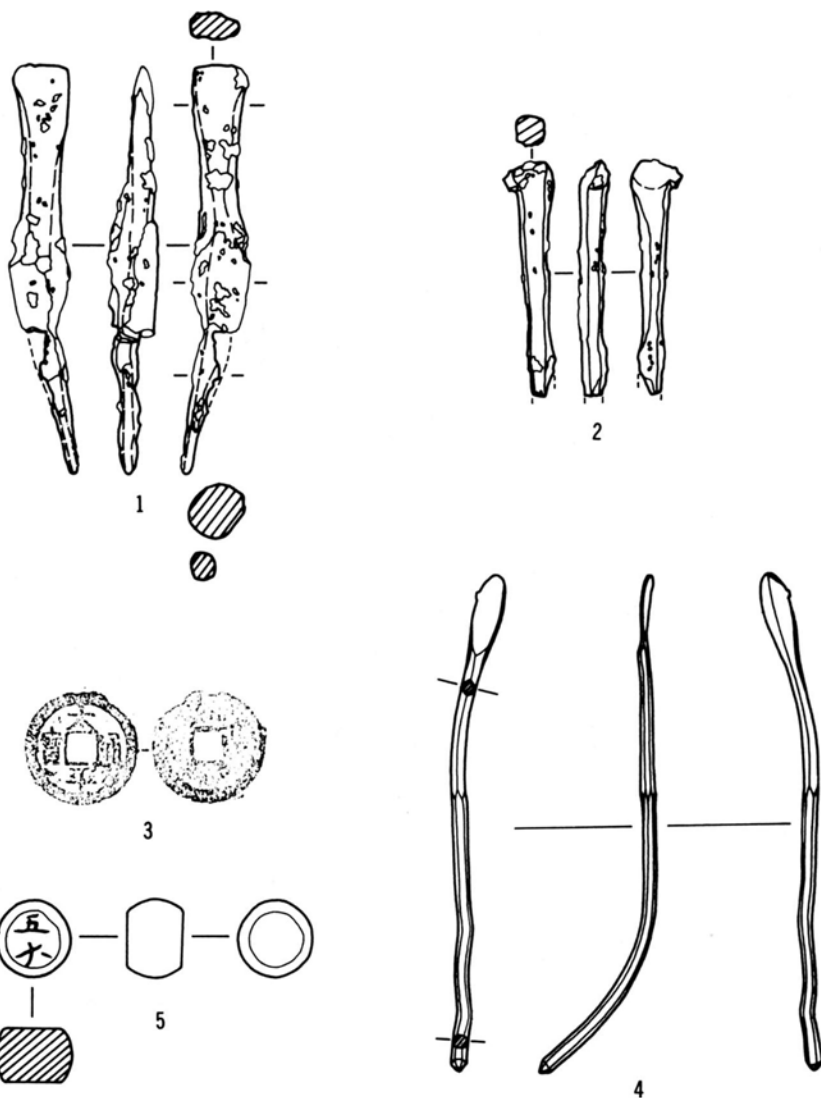
第20図1は軒丸瓦で瓦当の径は約17cmを測る。瓦当は内区に仏桑華（註7）（ボタンの可能性もある）の図案を中心に豆粒状の珠文を配している。

瓦当と丸瓦の接合は瓦当の縁に丸瓦の凹面端部をのせ、保強粘土で接合している。瓦当の裏面にはやや小ぶりの左手の圧痕が認められる。色調は灰色で焼成は良い。第2層0-20cmレベルの出土。

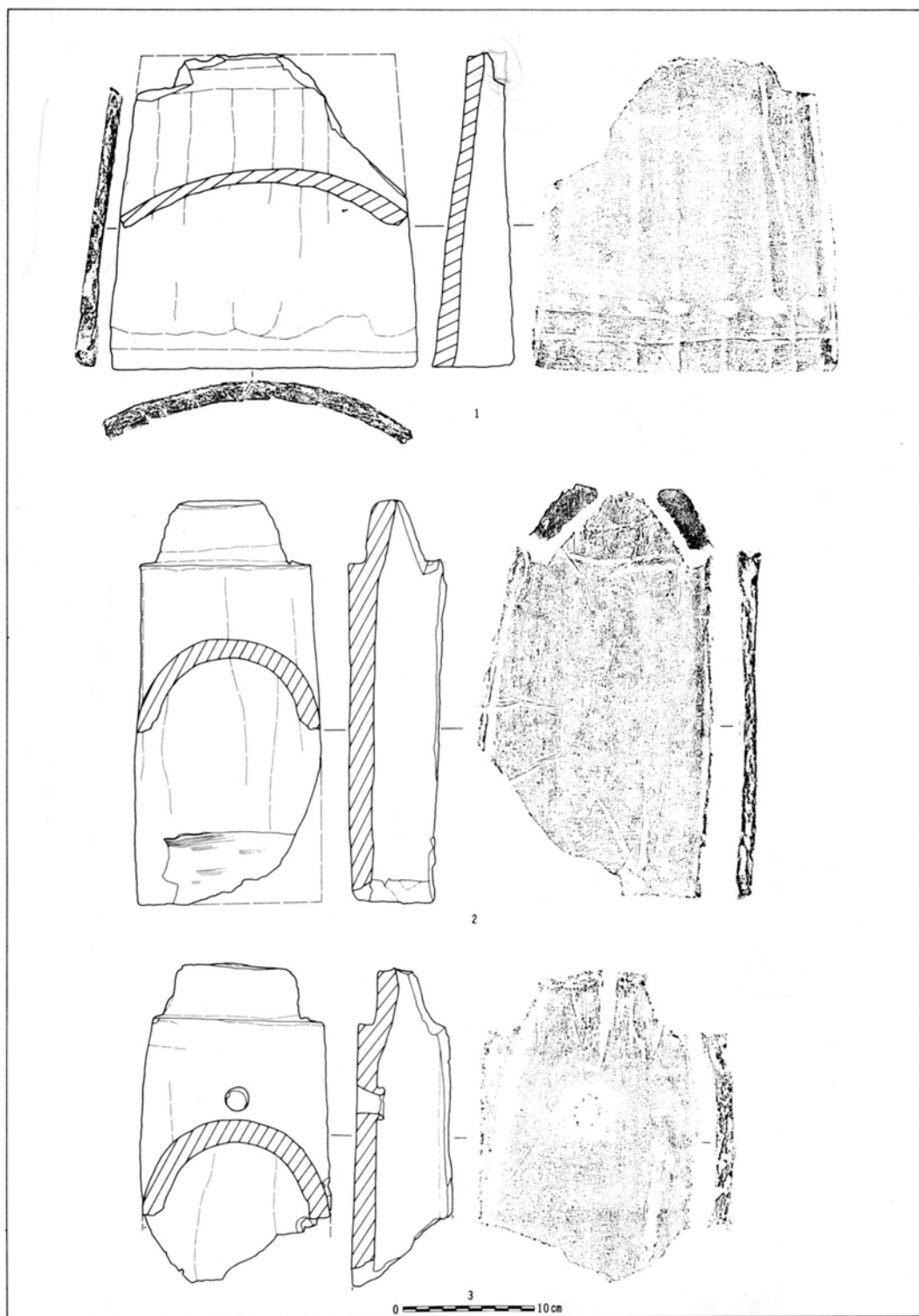
同図2は垂尖軒平瓦の瓦当部右側半分の資料である。内区には花文（ボタン？）とキザミのある葉が認められる。色調は表裏面で橙色、胎土が灰褐色のサンドウィッチ状を呈する。焼成は良好である。第2層0-20cmレベルの出土。



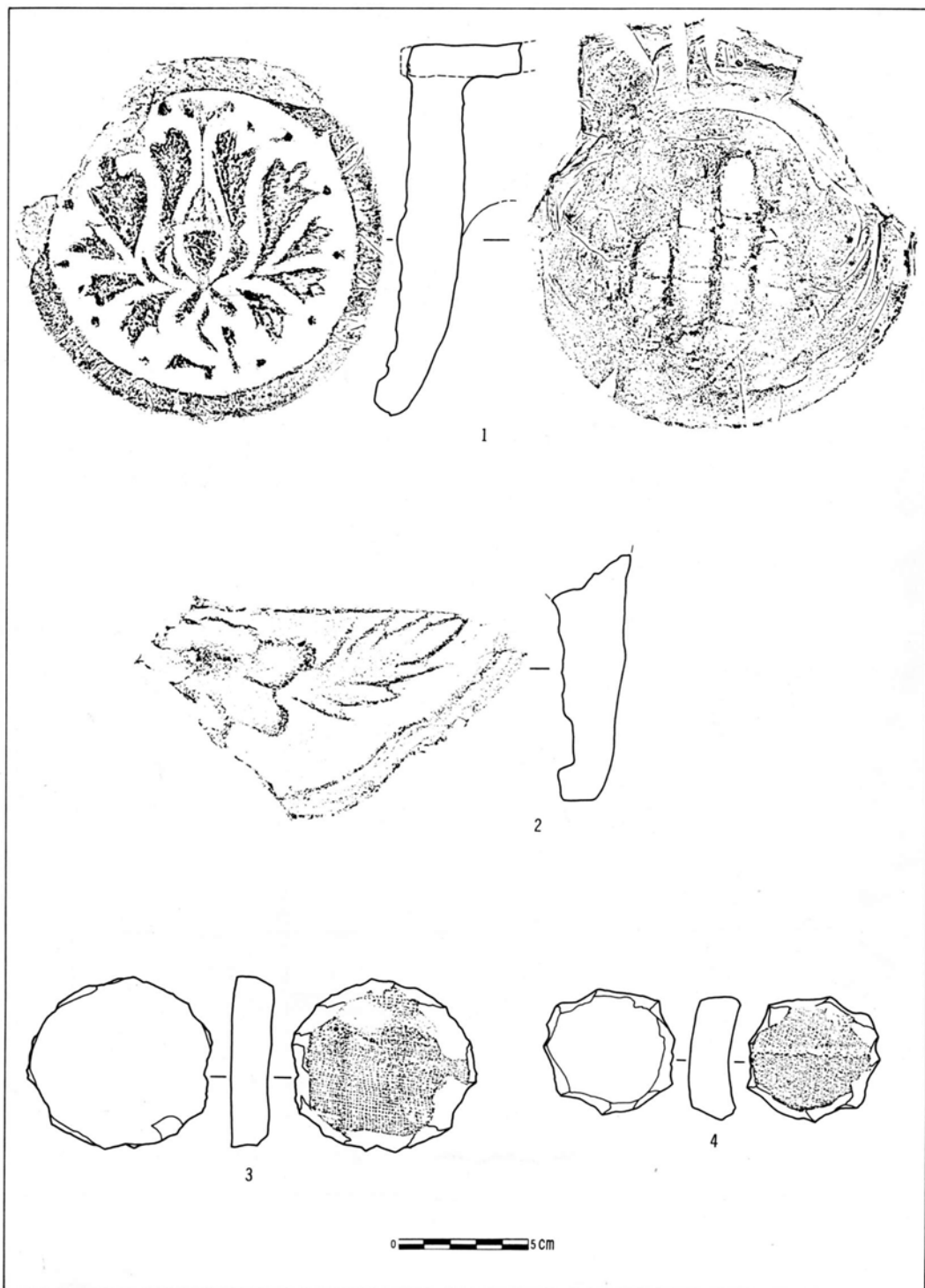
第17図 松林地区の遺構実測図



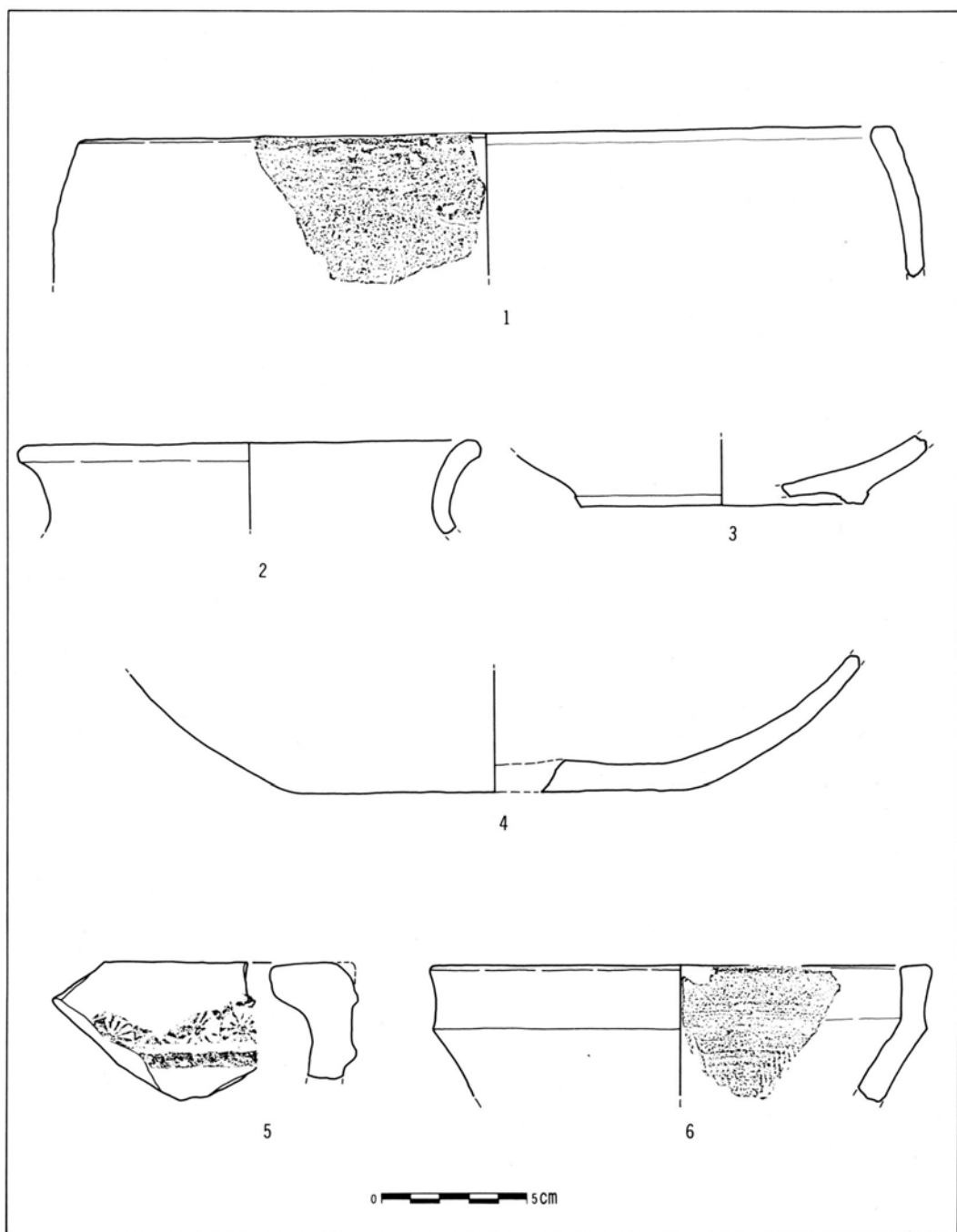
第18図 鉄製品（1・2），青銅製品（3～5）



第19図 瓦 (1～3)



第20図 瓦（1・2），円形状製品



第21図 土器（1～4），瓦質土器（5・6）

5 土 器

第21図1は、口径が内傾する鉢形が想定されるものである。口唇を平坦に成形し、内面側には内傾する斜面を作る。器面は両面とも入念なナデ調整で、胎土には石英・滑石を混入する。色調は茶褐色、裏面では赤褐色を呈する。焼成は良い。口径は推算約28cmで第2層の出土である。

同図2は壺形の口縁部破片で、口縁は外反する。器面は両面ともナデ調整である。器色は表面で黄褐色を呈するが、裏面は暗褐色で、焼成は良い。胎土には石英>黒色片>磁鉄鉱を混入する。口径は約16cmである。第1層より出土。

同図3は陶質土器と称呼されているもので、低い高台を作る底部である。外底には削り痕も認められる。

同図4は底径の広い平底で、底面より外彎して立ち上がる。器面は両面とも雑なナデ調整で、器色は裏面で黄褐色、表面では赤褐色を呈する。焼成は良く、胎土には赤色粒と石英質砂粒を混入する。底径は約14cmで第1層の出土である。

6 瓦質土器

第21図5は菊花文のスタンプが認められる口縁部破片で、菊花文の上下に各1条ずつ、凸帯が横走る。口縁の内面の端部には張り出しを作る。器色は面で黄褐色、中身では灰色を呈する。第6層より出土。

同図6は逆「く」の字状に折曲する口縁部である。内面には摺鉢に見られる縦位のきざみが認められる。色調は灰色で、口径は推算約17cmを測る。第1層の出土である。

7 青 磁

第22図1は口縁端部が外反する碗である。釉色はオリーブ色で、高台外面まで施釉するが、所によって体部で止まっている。釉に貫入は認められない。サイズは口径約14cm、底径約4.5cm、器高約6cmで第2層の出土である。

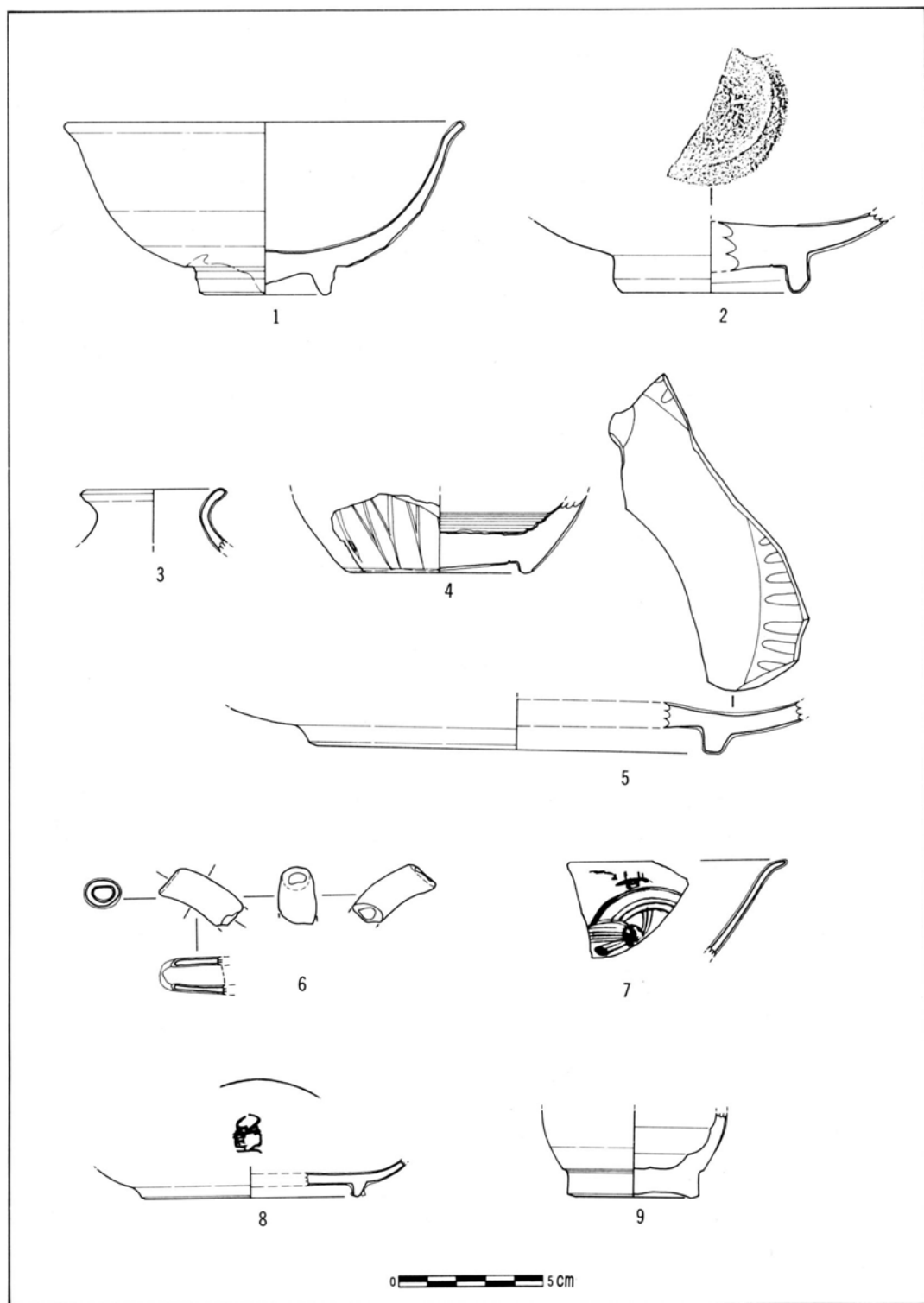
同図2は底部の資料で、内底の露胎には印花文が認められる。高台は竹節高台で、緑色の釉を外底まで施釉する。釉には細かい貫入が走っている。底径は約7cmを測る。第1層の出土。

同図3は壺形の口縁部破片で、端部は著しく外反する。釉色は薄い緑色で、細かい貫入が見られる。口径は約5cmを測る。第2層の出土。本標品は釉色からすると、青白磁に含まれる可能性も考えられるが、判然としないため一様ここであつかうことにした。

同図4は碁笥底の底部資料である。体部にはススキの葉先様の細彫りが認められる。釉は緑色、内外底まで施釉するが、畳付では掻き取っている。又、内面でも、部分的には釉のかかっていないところもある。畳付内側や体部下方には粗土の付着が見られる。底径は約6.5cmで第2層の出土である。

同図5は盤の底部と思われるもので、内面には丸彫りの蓮弁文と圏線が認められる。釉は緑色で高台の内側まで施釉する。釉に貫入は見られない。底径約14cmで、第1層の出土である。

同図6は注口破片である。釉色はオリーブ色で、注口の内面にまで施釉する。注口の穴は長径7mm、短径5mmの隋円形を呈する。第1層の出土。



第22図 青磁（1～6），青花（7・8）褐釉土器

8 青 花

第22図7は碗の口縁部破片と思われるもので、端部は外反する。文様は外面と内面の端部に界線を配し、外面の下方には大がらの文様を描くが破片のため構図は判然としない。第1層の出土。

同図8は底部の破片で、内底には界線と文字様の文様が認められる。釉は全面に施釉するが、畳付では掻き取っている。畳付には砂が付着している。底径は約7.5cmを測る。第1層より出土。

9 褐釉陶器

第22図9は高台を円盤状に削り出す底部の資料である。釉は褐色で外面の体部下方まで施釉する。内面にはうず巻状の削り痕を明瞭に残している。底径は約4.5cmで、第1層の出土である。

第3節 南側城門地区

A 遺 構 (第23図)

一次調査で確認された城壁の北東方向約20mの所から検出されている。

城門を構成する両側の石垣は及び構築層に差異が認められる。東側の石垣は地形沿ってフラット面の縁端部に積まれ、北方の城内へL字状に曲げられている。石垣は布積みで石のつくりはこれまで城壁に比べやや粗造である。内部には中ごめ礫が存在する。

一方西側の垣は東側同様にその縁端に位するが、その方向は南方につらなり逆L字状を呈する。石垣は両側に粗割りの石を組み内側にも同サイズ角礫を入れたもので、前者の石垣が黒色混りの赤土層、後者が赤土混りの黒褐色土層上に造られている。

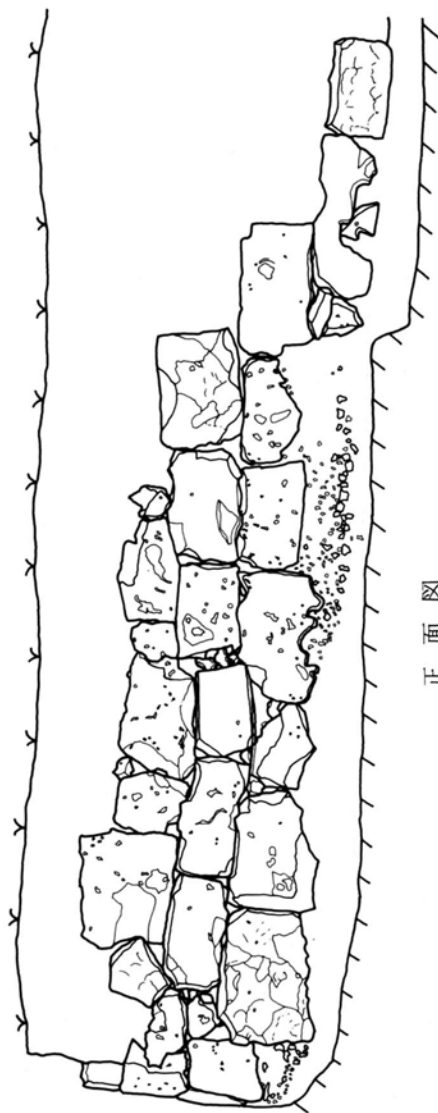
なお、当城門から城内には20°の傾斜した坂道となっている。ところで当城壁とそれよりさらに南側に位置している一次調査で検出された城壁とは、その構造上の違いおよび同一や延長上での展開で結ぶことが難しいことなどから城郭の第一門としては見なし難だ。したがってこの遺構は城内の各フラット面を結ぶ門としての蓋然性が高いものである。

B 遺 物

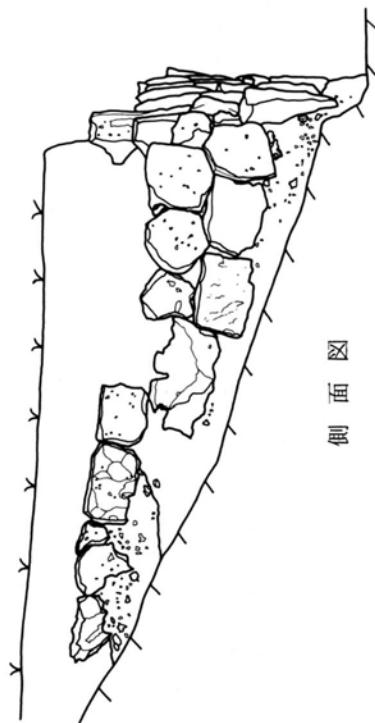
本区の発掘は、層位及びレベル発掘ではなく遺構の露出に終始したため、遺物は表採資料に等しい。そのため、今回の概報では本区の遺物報告は省略して本報告に委ねることとする。

註

1. 中山盛茂編著『琉球史辞典』文教図書
2. 尾崎元春編「甲冑」『日本の美術 第24号』至文堂
3. 九州歴史資料館資料普及会『大宰府史跡一昭和55年度発掘調査概報一』昭和56年3月
4. 森田勉氏より御教示いただいた（昭和59年1月26日浦添市教育委員会にて）。
5. 石垣市教育委員会『ビロースク遺跡発掘調査ニュース』
6. 金武正紀・松田朝雄・宮里末広「今帰仁城跡出土の元様式青花と共伴の陶磁器」日本貿易陶磁研究No.3』1983.
7. 沖縄県西原村教育委員会『内間御殿』昭和53年3月



正面図



側面図

0 1 m

第Ⅳ章 ま と め

浦添城跡は、沖縄県浦添市字仲間城原に所在する沖縄県考古学編年上の城時代遺跡である。その歴史的展開については第Ⅱ章第1節で述べたとおりであり、城の創建年代や廃城となった由来についてはつまみびらかでない。

城跡はほぼ東西に走る標高130～140 mの石灰岩丘陵台地の先端部に立地している。現在、城の中心部にはコンクリート製の展望台や戦没者慰霊塔が建立される等都市公園として市民の憩いの広場になっている。城の規模は東西380 m、南北60～80 mにおよび県下に広く分布するグスクの中でも比較的規模が大きく且つ著名なグスクの一つになっている。ところがこの城跡は、歴史的な由緒からいっても、また規模の上からみても当然貴重な文化財として指定されるべき遺跡であったにもかかわらず、種々の事情等により今日まで未指定文化財として行政保護措置が講じられぬままに放置されるという状態に置かれていた。

近年当地域を含む該地の公園事業が俄に活発化し、文化財の保護が大きな行政的課題として問題になる中で浦添市教育委員会では、城の実態を把握し、その行政的保存措置を講ずるという目的で発掘調査事業が取り組まれることになった。したがって、今度の調査は、浦添城跡を究明するという学問上の要請に答えるというだけでなく、浦添城跡の保護について具体的な推進策を図るという文化財保護行政上の課題をもになうものであった。

浦添城跡の調査については、これまで伊東忠太、鎌倉芳太郎両氏による試掘調査、大川清氏による瓦の調査、旧琉球政府文化財保護委員会による城門確認のための調査等が知られている。ところがこれらの調査はいずれも短期間で断片的なものであり、浦添城跡の全体像をとらえるまでにはいってない。国・県の補助事業として計画的且つ長期的に取り組まれる調査は今回の調査がはじめてであり、その結果について研究者をはじめとする多くの市民から期待が寄せられたことはいうまでもないことである。

調査は、一次調査が昭和57年6月から約三ヶ月間、二次調査が昭和58年6月から約三ヶ月間に亘って実施された。二次にわたる調査の結果、城の縄張図の平面測量、城郭内における城普請の様子、石塁・石積・石列・掘立柱の建物の礎石・基壇の一部・溜め井等の遺構、および輸入陶磁器、土器、瓦器等の生活容器、鉄・鎧の金具・切羽等の武器・武具の類、あるいは建物の金具類等の遺物が多量に出土した。これらの概要については、『今姿を見せる古琉球の浦添城跡』（昭和58年3月発行）そして本書の第Ⅲ章調査の成果で記述したとおりである。

ところで、これらの諸成果を基にグスクの構築について考察すると、浦添城跡は第一期から第四期（あるいは第五期）の時期にわたってその興亡が展開されていることが想定される。以下各期の状況を報告してまとめにかえたいと思う。

第一期の時期は、城跡内を覆う堆積層の最下層に伴う遺構や遺物群である。具体的にはSHOI試掘区の発掘区でコーラル整地層の下層で検出された掘立柱穴群の構築物である。この第一期の構築範囲は、現在の展望台を中心とする広場やさらにこの広場の西側にあたる城門区と呼ぶ調査区の範囲内に限られるようである。層序は黒褐色土層を呈しており、出土遺物から見るとこの時期は、ほぼ13世紀の末から14世紀の初頭頃に相当し本城跡の初期の段階にあたる。城普請としては、本格的な土木造成工事がまだ行なわれていない段階であり、構築物として野面の低い石垣、掘立柱の建物群が構築

された時期である。

さてこの第一期の全容を知るためには第二期に相当する遺構面の破壊を前提としなければならず、下層の掘り下げについては試掘ピットを1～2ヶ所をあけることにとどめておくことにした。したがってこれまでの調査で第一期の建物の構造や配置、野面積み地壁の様子などについては全くつかむことができなかった。

第二期は、グスクの縄張りがいわゆる「コグスク地区」（浦添城跡の東側先端部で標高が城中最も高いところに位置している。）にも拡大され、城の規模が大きくなると同時に構築物の一部に瓦葺が登場する時期である。絶対年代としてはおよそ14世紀後半から15世紀初頭頃に相当する。瓦葺を建てるために浦添城跡では、グスク地区内の石灰岩を削り、コーラルを大量に搬入して城内の整地を行っている。この整地層は厚い所で3m、薄い所でも50cm以上の層厚を計る。このことから考えると、浦添城跡における第二期は、土木工事による城普請が大がかりに行なわれた時期であった。「癸酉年高麗瓦匠造」や「大天」の在銘瓦が城内構築物の屋根を飾ったのもこの時期であろう。

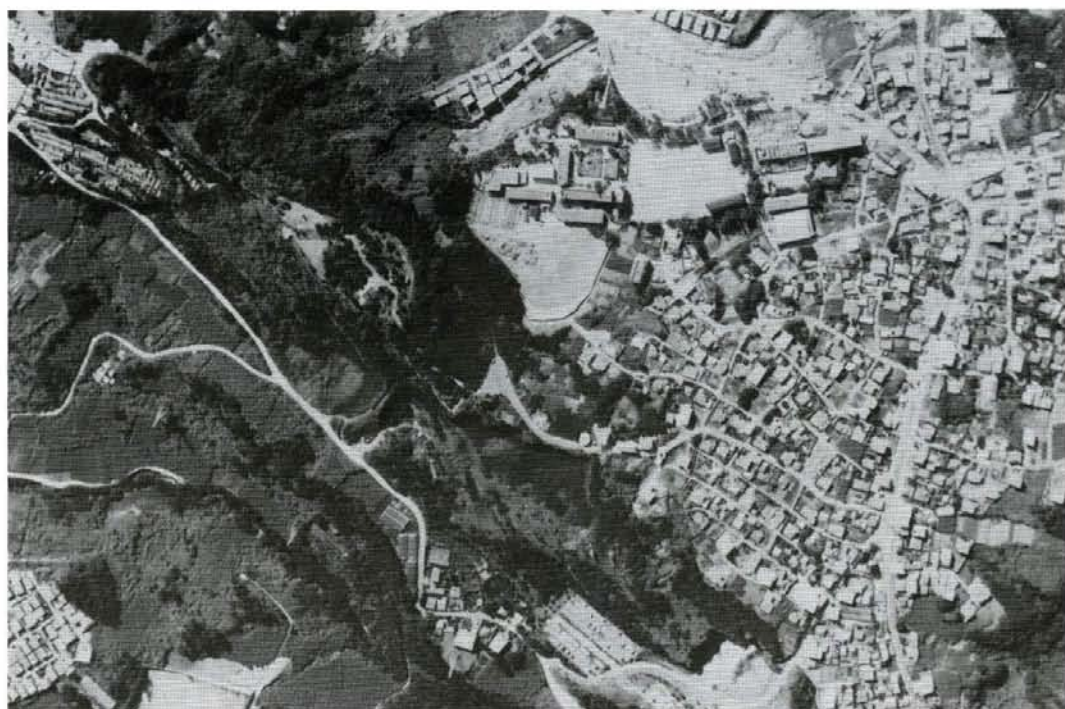
第三期は、グスクの規模が急激に小さくなり、その中心が現展望台周辺の平場に集約される時期である。第二次調査によって検出された石畳や溜め井等の構築物はこの時期のものとして理解されよう。ところで第三期の遺構群は、浦添城跡の堆積層の中では上層に集中しているために後世の削平や攪乱を著しく受けている。今回検出された石畳がそのいい例であり、石畳の基部に相当する部分はよく保存されているにもかかわらず上部はことごとく破壊されてしまっているという状態であった。したがって石畳の性格や上部の構造およびその規模については知ることが出来なかった。

第四期は、第三期の時期とほぼ重なる時期であり、第三期に極めて接近した時期として把握することが出来る。第四期としてとらえることの出来る明確な遺構はまだ確定されていないが、しいていえば溜め井の東側に露出した平面円形状の遺構等を挙げることが出来る。この遺構は基底部の直径60cm、上端部直径90cmの円筒形を示し、現在の円形井戸を彷彿させるものである。遺構の下位が不透水層に達する深さまで掘り下げられていないこと、石積みの目地に粘土張りが認められていないということなどにより井戸としては見なし難く、性格不明の遺構となっている。この時期の構築物としては、松林地区の下層でも若干確認されているが、上層に出土している石畳路と石垣遺構に被覆されその構造を知ることは極めて困難なことであった。

第五期は、松林地区の瓦溜りの中から出土した瓦が使用された時期である。瓦が明式製法による灰瓦であること、また瓦に漆喰が付着していることからこの奈辺に近年まで建物が存在していたことが推測される。とすれば、古老がはなしていた番所の建物に使用されていた瓦である可能性も強い。ところで第二次調査で松林地区から検出された石畳と石垣を有す構築物は、いったいどの時期に該当するのだろうか。第四期の構築物かそれとも第五期の構築物か。これらの遺構の一部は現地表面でも確認されることから第五期に相当する蓋然性が極めて高いといえよう。

以上浦添城跡は、1次・2次と調査が進むにつれて、しだいにその実体が少しずつ明らかにされてきており、文化財としての重要性もますますクローズアップされるようになってきた。しかし、まだまだ解明しなければならない課題も多く残され、昭和59年度の第3次発掘調査にける期待も大きくなっている。

今後、浦添城跡が学問的に究明される中でその重要性が認識され、文化財としての適切な保存と活用が一日も早く講じられるよう一層の努力が必要である。



浦添城跡付近の航空写真



第1図版

浦添城跡遠景（南側より）



発掘風景

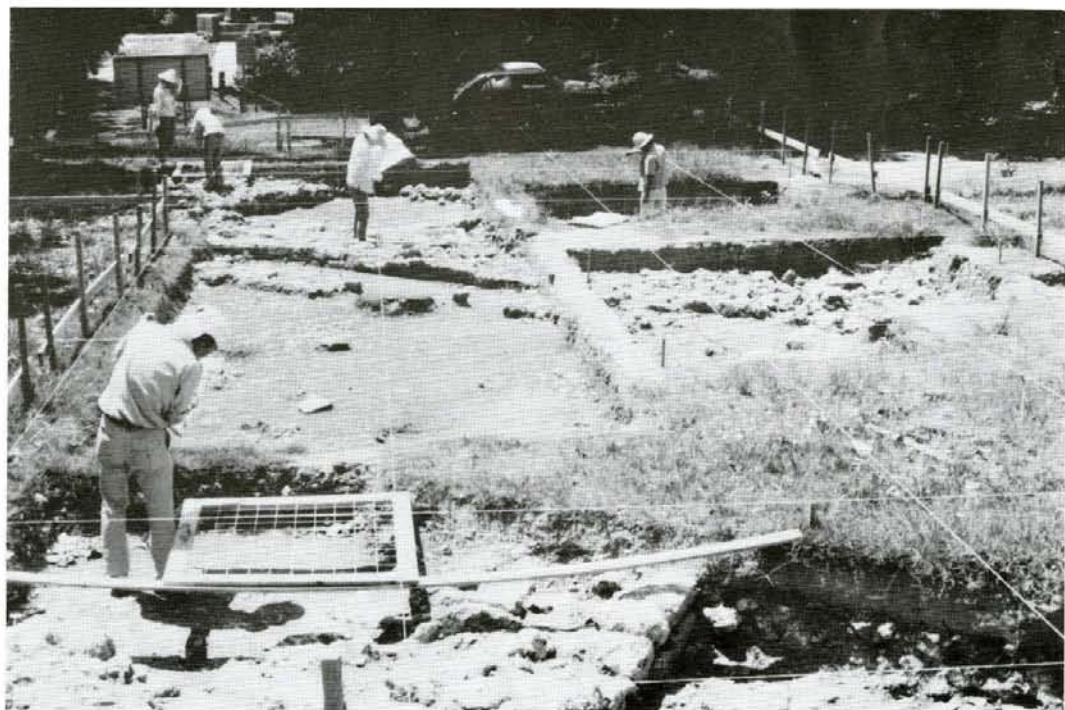


第2図版

発掘風景



見 学 風 景



第 3 図版

実 測 の 状 況

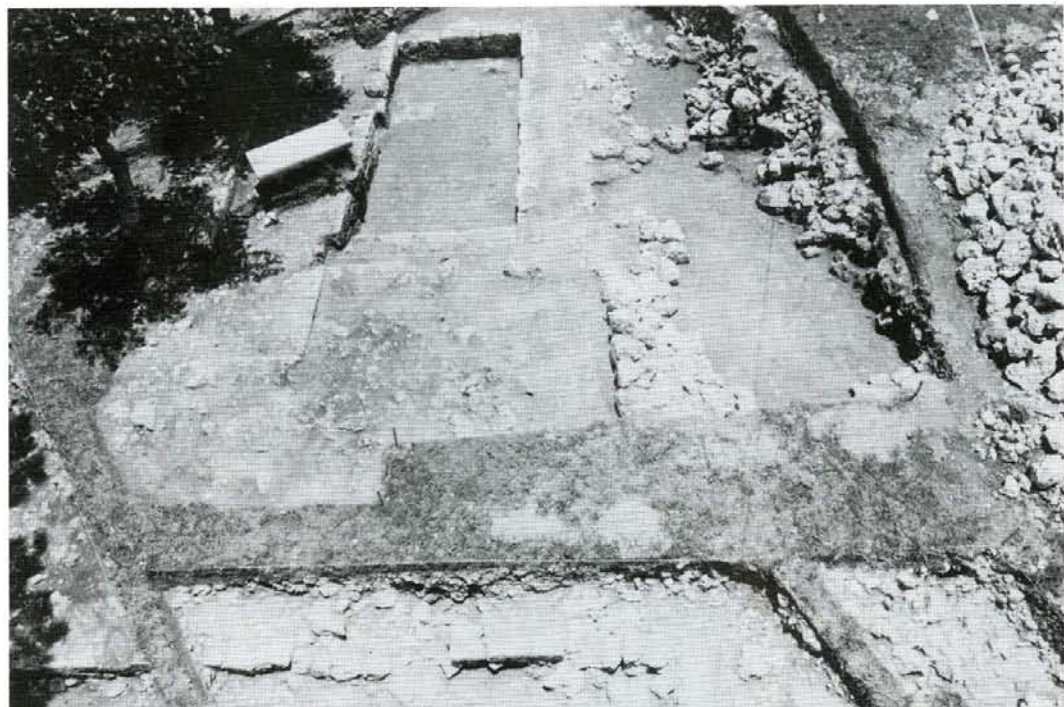


石 壘



第4図版

石 壘



溜 め 井

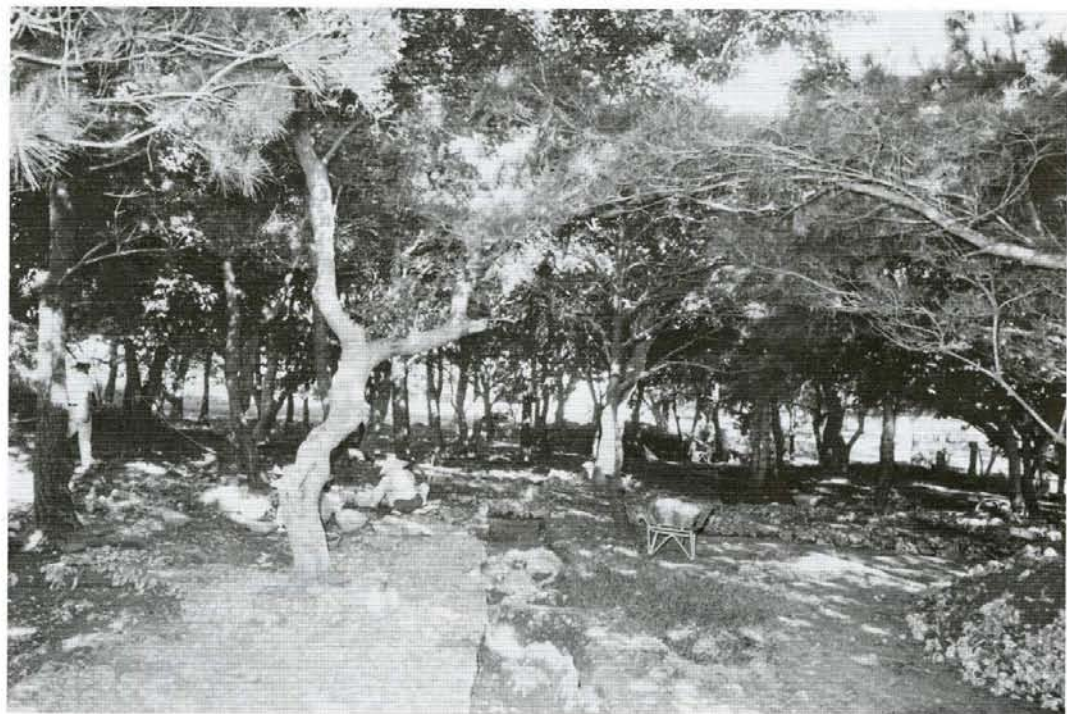


第 5 図版

溜 め 井



溜め井構遺区の東壁より現われた遺構



第6図版

松林地区の遺構



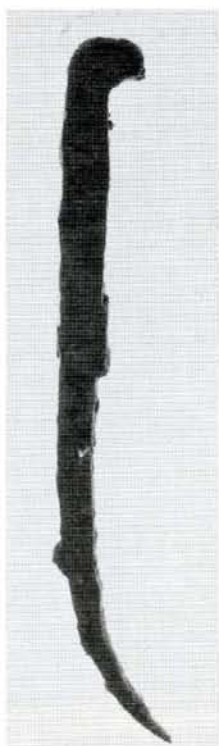
松林地区の遺構



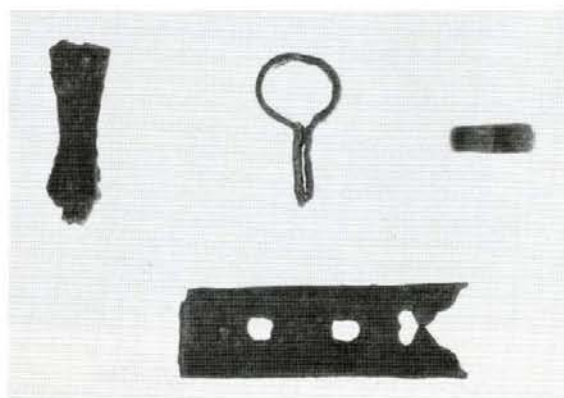
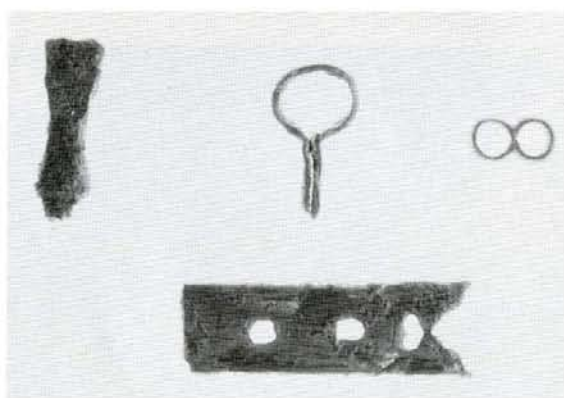
第7図版

南側城門地区より出土した石垣

1



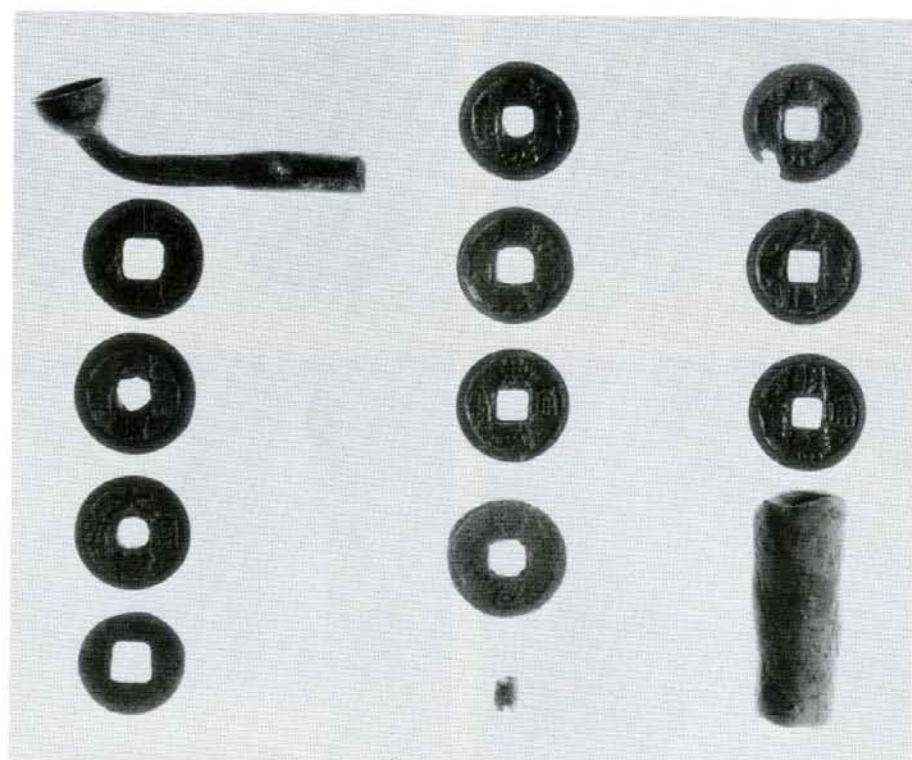
2	3	4
5		



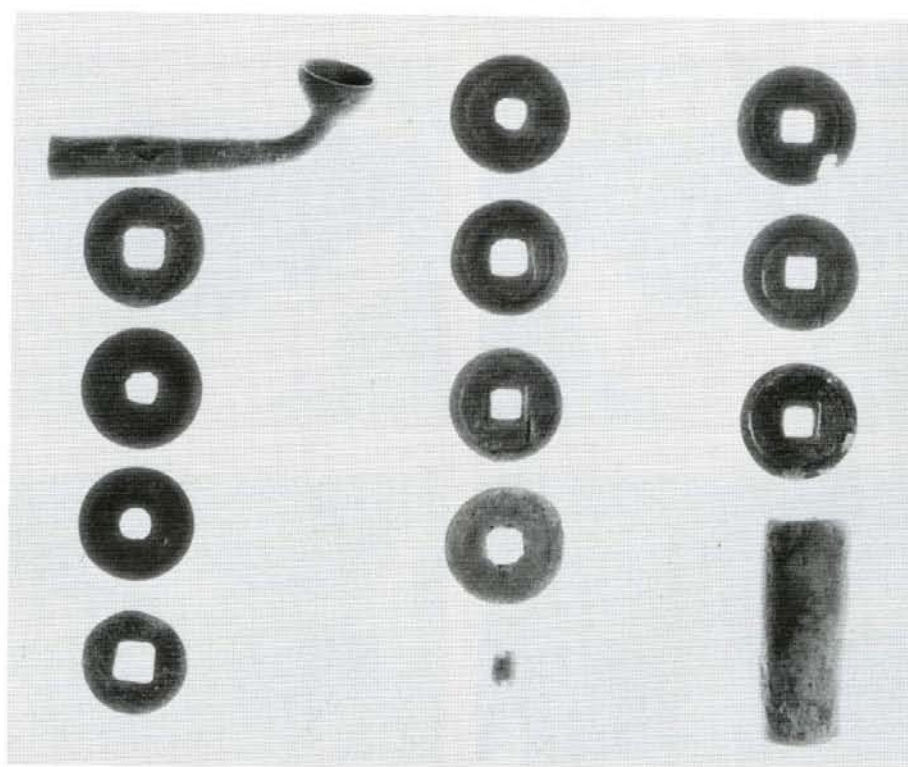
第 8 図版

鉄製品 (釘, 鏃)

青銅品

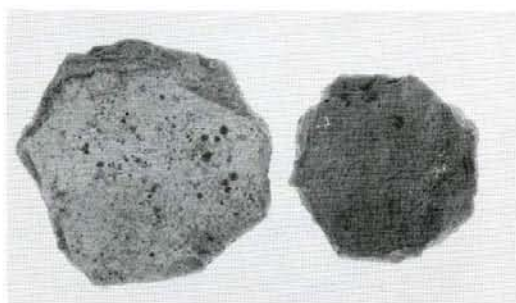
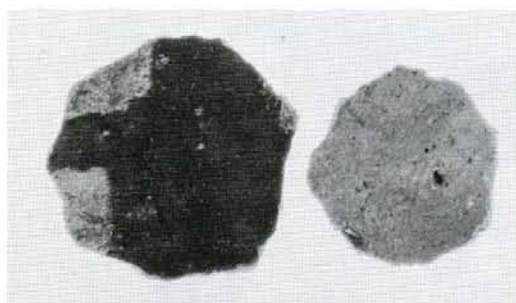


1	2	3
4	5	6
7	8	9
10	11	14
12	13	

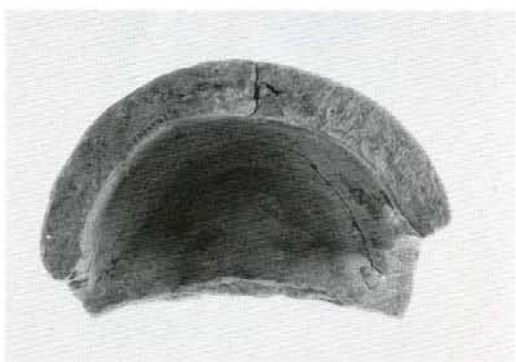


第9図版 雁首，古錢，玉，瓦質製品

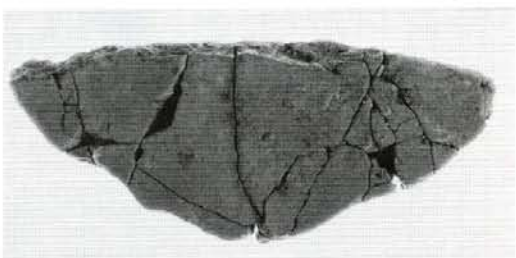
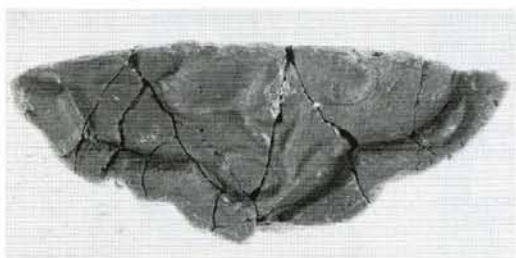
1 2



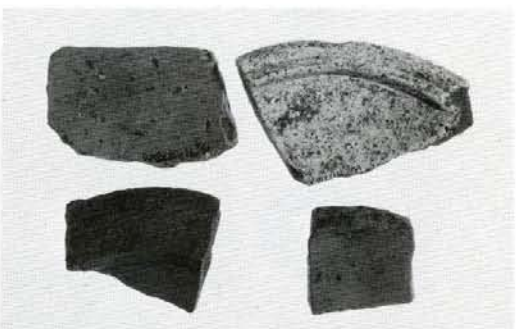
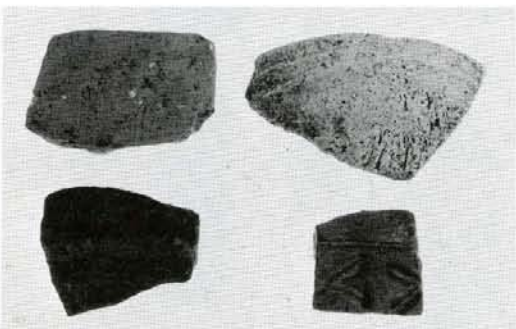
3



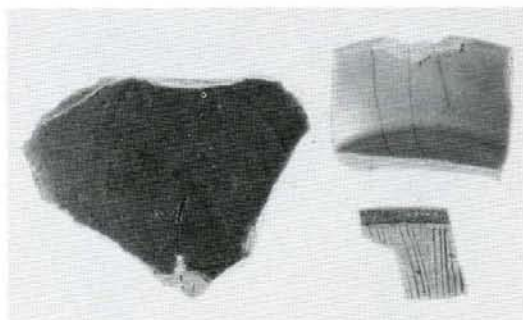
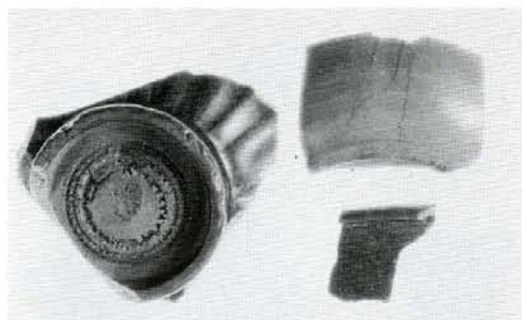
4



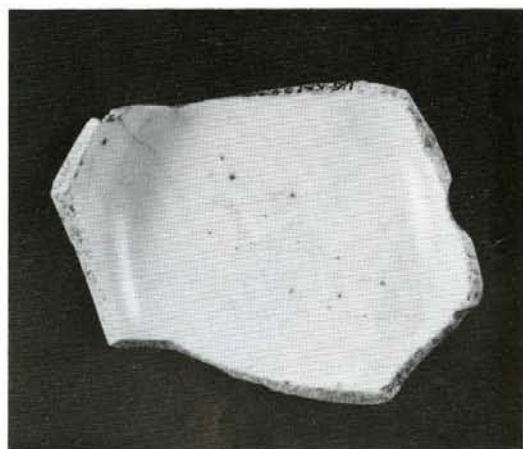
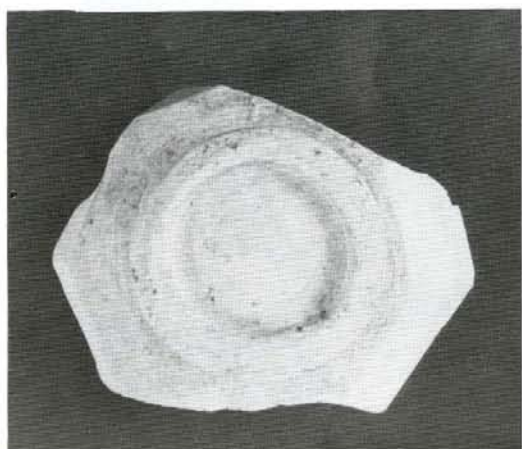
5 | 6
7 | 8



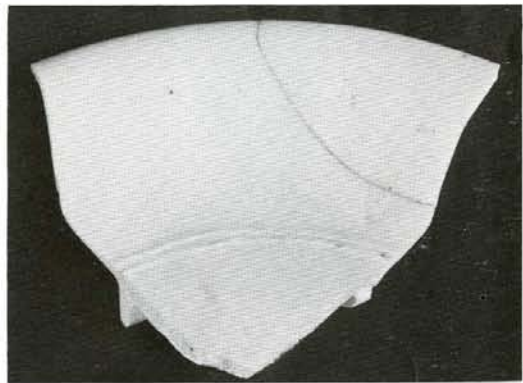
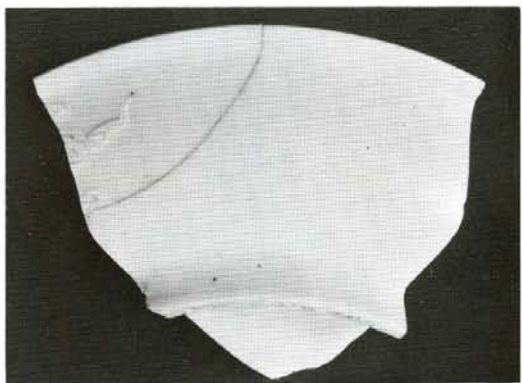
第10図版 円形状製品，瓦，土器，須恵器，瓦質土器



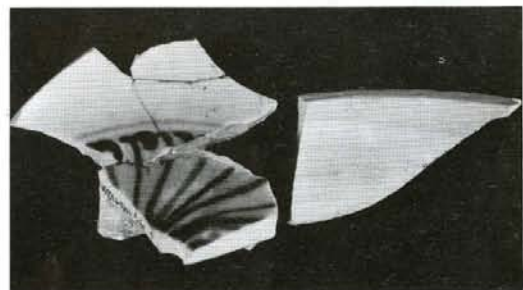
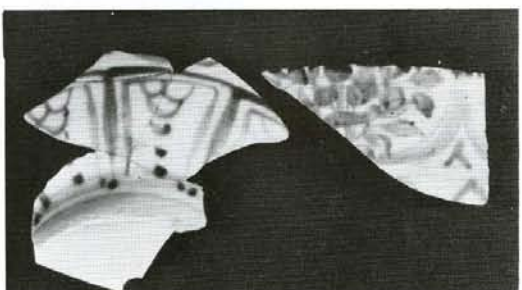
1 $\frac{2}{3}$



4



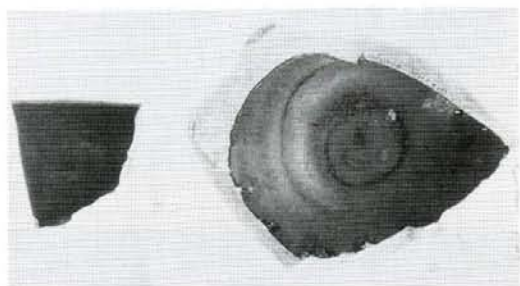
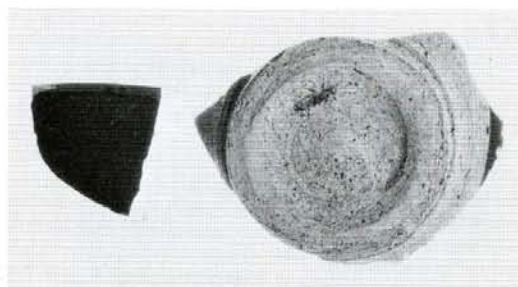
5



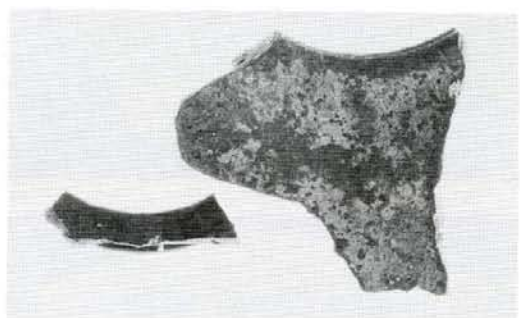
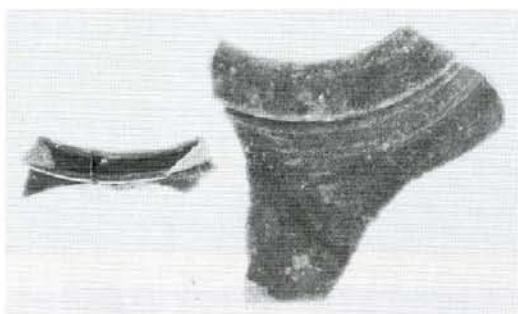
6 7

第11図版 青磁, 白磁, 青花

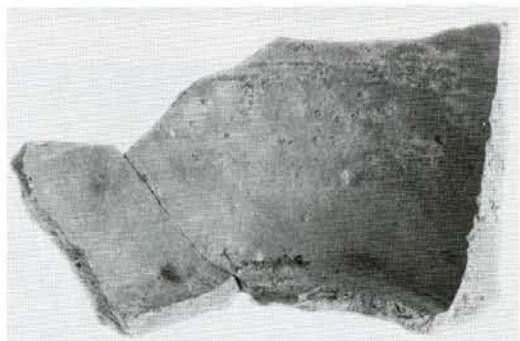
1 2



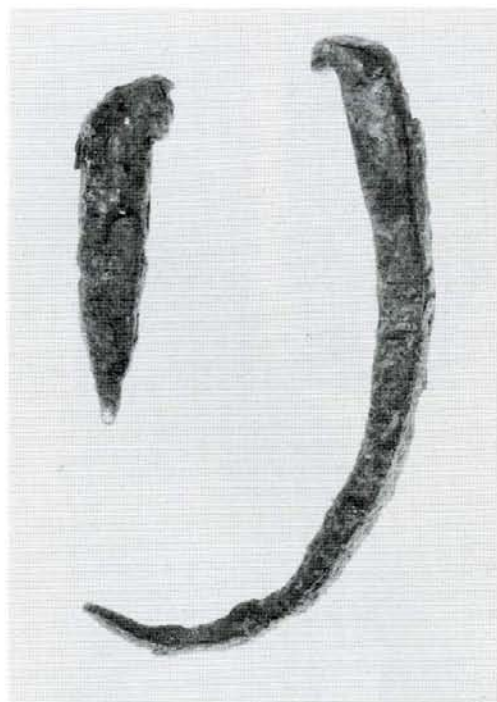
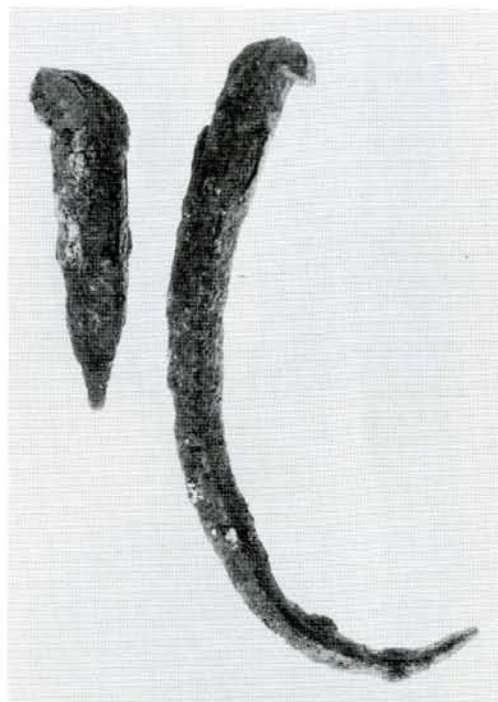
3 4



5



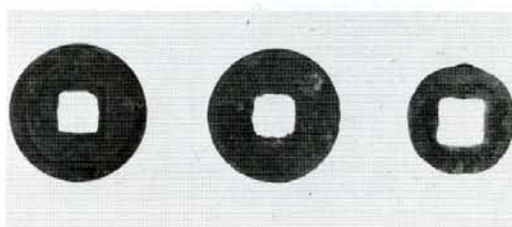
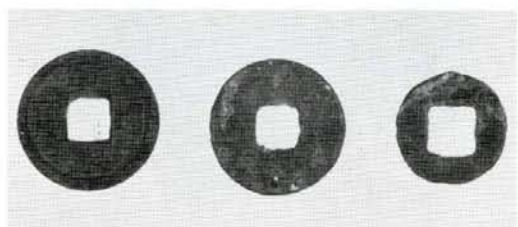
第12図版 黒釉陶器，褐釉陶器



1 2

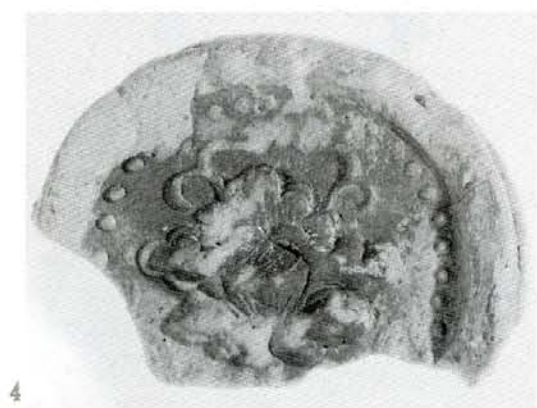
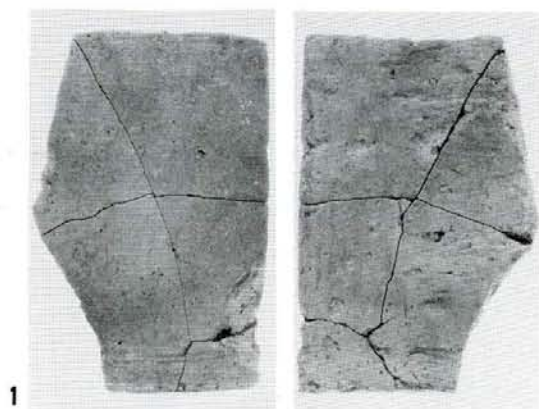


3

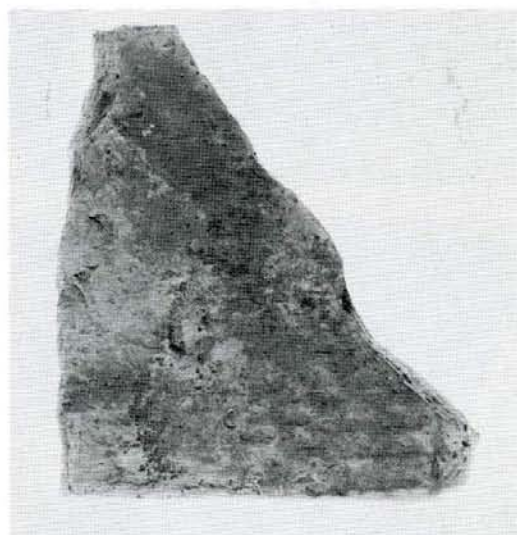
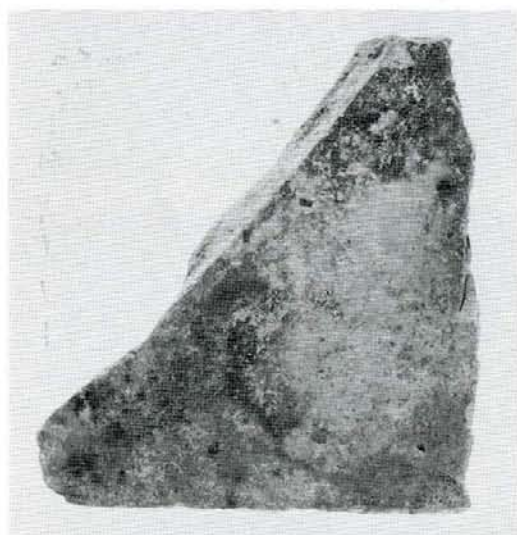


4 5 6

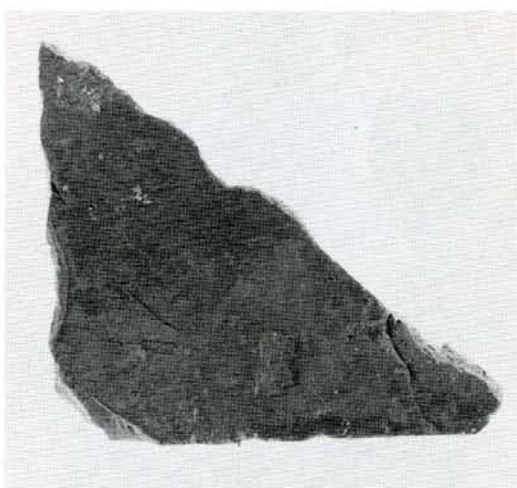
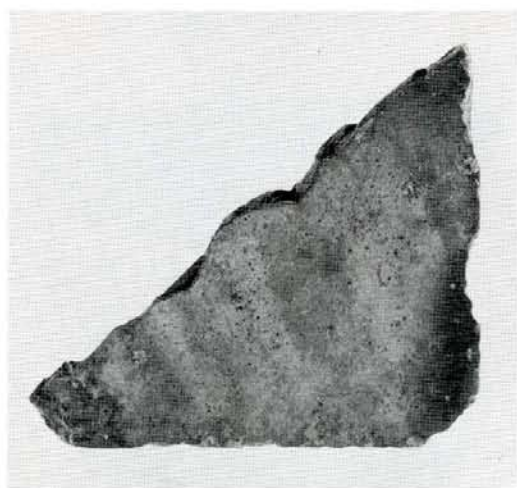
第13図版 鉄製品，古銭



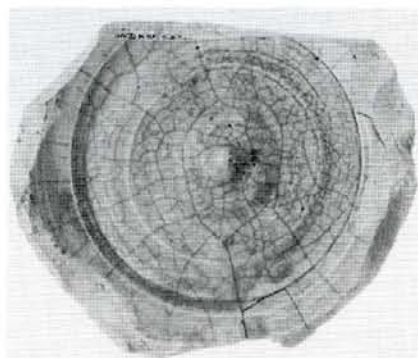
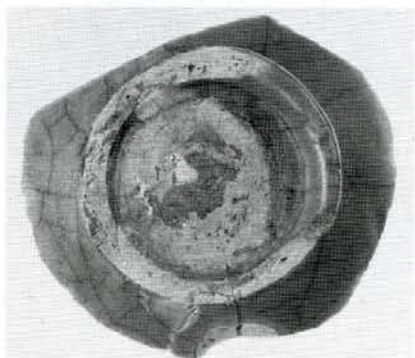
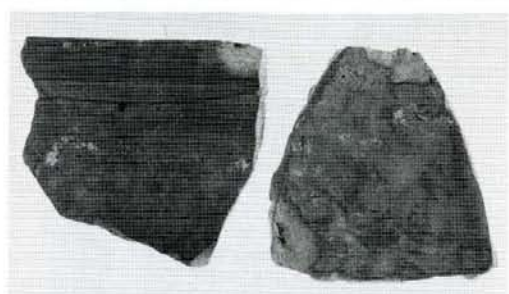
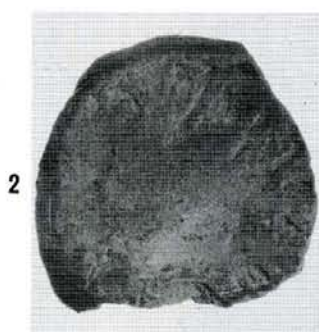
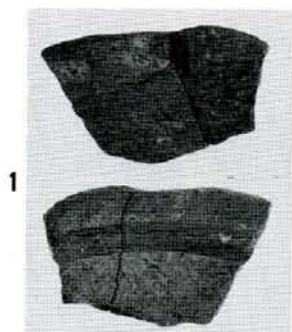
第14図版 瓦



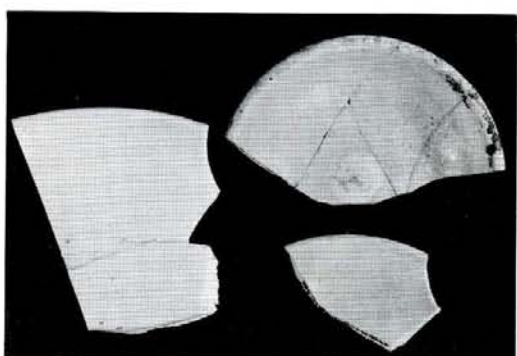
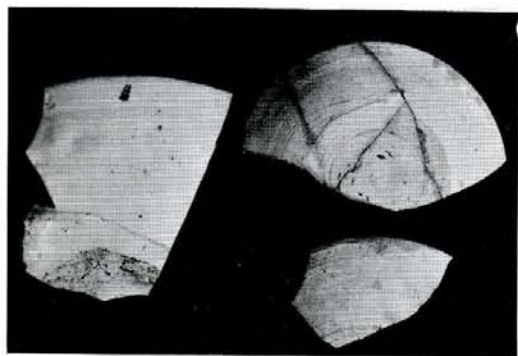
1



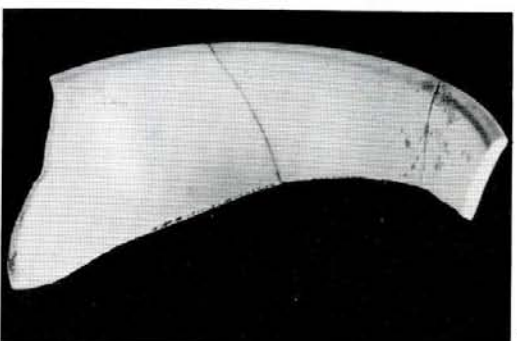
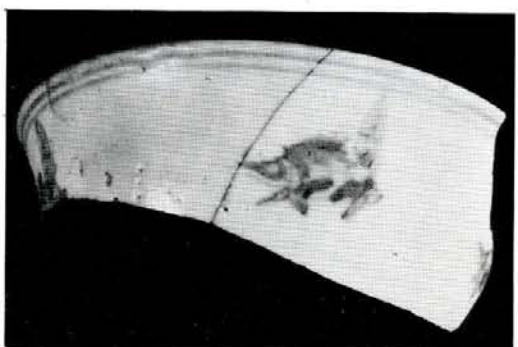
2



第16図版 土器，瓦質土器，陶器（備前焼摺鉢），青磁



1 | 2
| 3



4



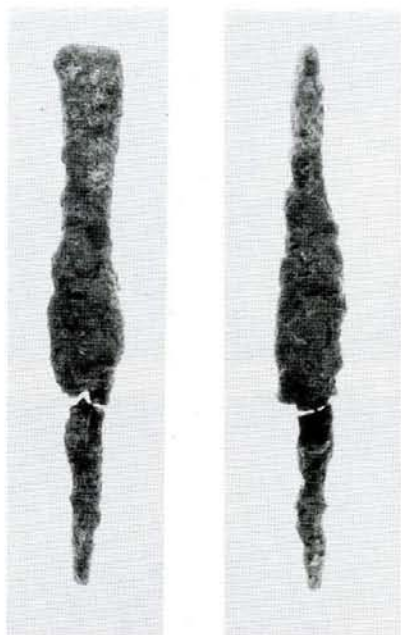
5



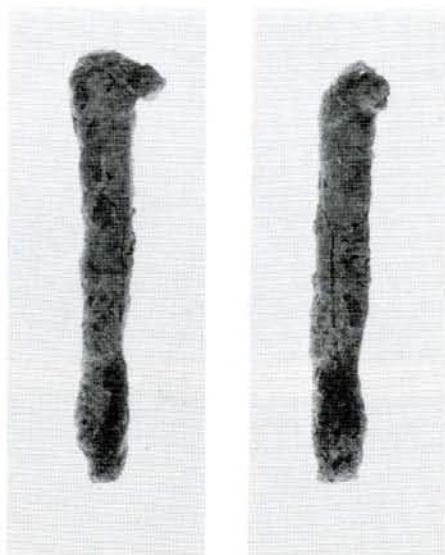
6

第17图版 白磁，青花，褐釉陶器

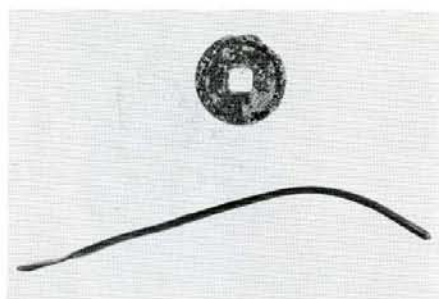
1



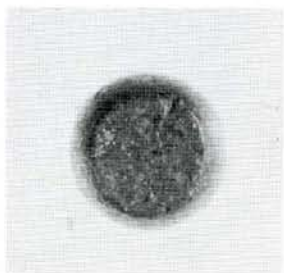
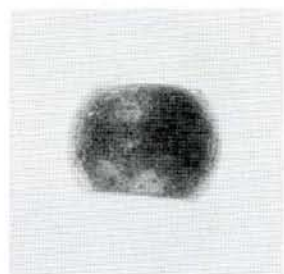
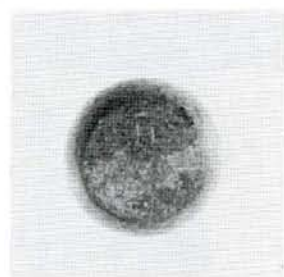
2



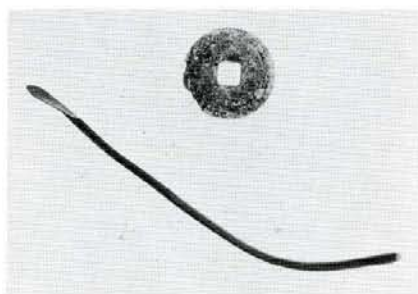
3



5



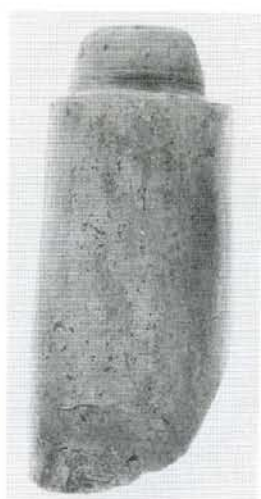
4



第18図版 鉄製品（鏃，釘），青銅品（古銭，カンザシ，不明）



1



2



3

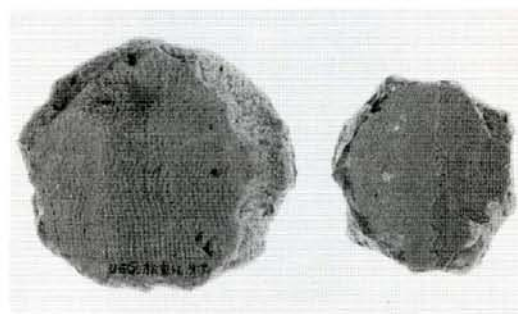
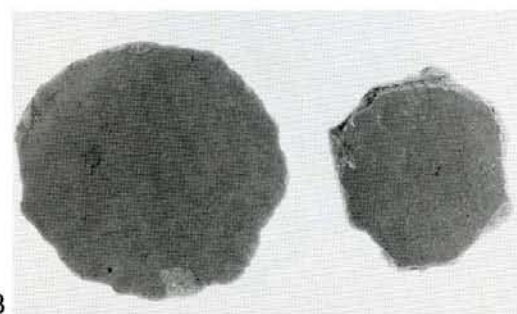
1



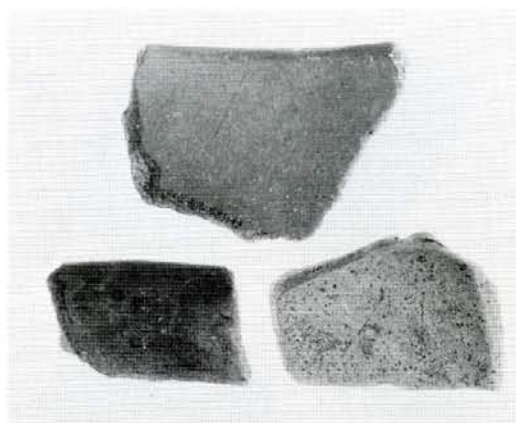
2



3



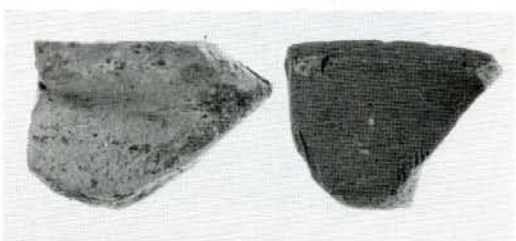
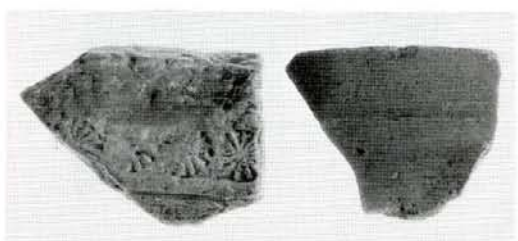
第20図版 互，円形状製品



1
2 | 3

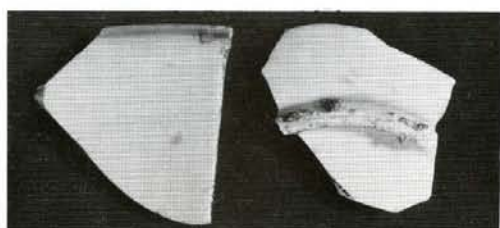
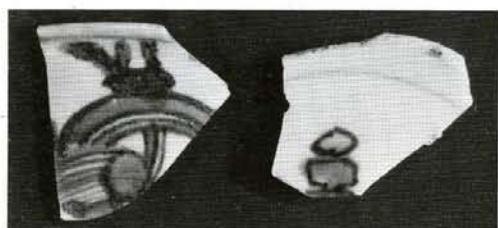
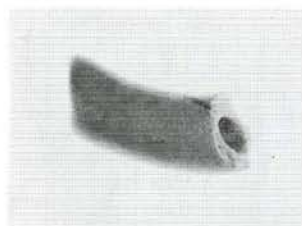
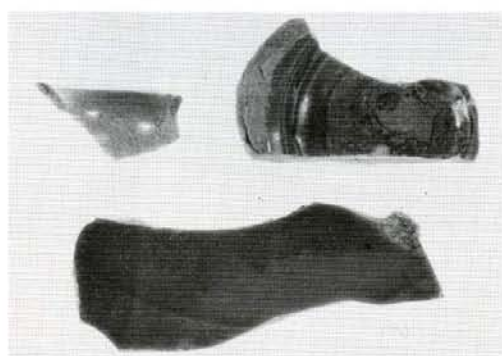
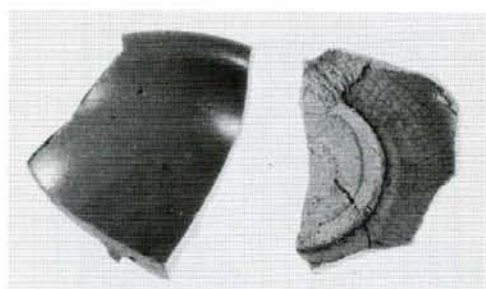
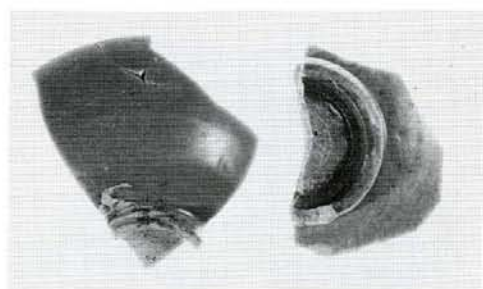


4



5 6

第21図版 土器，瓦質土器



第22図版 青磁，青花，褐釉陶器



浦添市民憲章

わたくしたちは、
古い歴史と新しい希望にみちた、
てだこの都市・浦添の市民として、
この憲章を定め誇りをもって
その実践につとめます

1. わたくしたちは、
自然を愛し、みどり豊かなまちをつくります。
1. わたくしたちは、
きまりを守り、住みよいまちをつくります。
1. わたくしたちは、
働く喜びをもち、活気にみちたまちをつくります。
1. わたくしたちは、
平和を愛し、文化の香り高いまちをつくります。
1. わたくしたちは、
心と体をきたえ、明るく健康なまちをつくります。

浦添城跡第二次発掘調査概報

発行日 昭和 59 年 3 月

発行所 浦添市教育委員会
浦添市字安波茶 380 番地
電話 0988-77-9404

印刷 那覇市上間 5 6 7
文進印刷株式会社
電話 0988-55-2323(代)